

底流の砂

この愛の向こう側に

水沢一条



湖面に風が輝いた。

晴れた冬の日の陽光が、無数に散りばめられたダイヤモンドのように煌めいていた。湖に迫り出した所に、ロッジ風の造りをした古い喫茶店が、歳月の重みとともにどっしりと腰を落ち着かせていた。その外見は、客を呼び込むような構えには程遠く、浮き世の柵を離れ、過去へと沈殿していくかの様相だった。

旅人が、時折観光に飽きて立ち寄ることがあるが、通りすがりの浮かれた気分とは相容れない雰囲気を感じ出していた。まるで人生に疲れた女が、妖気に曳かれて束の間羽を休めるのを待ち受けているかのようだった。

朽ちかけた丸太木の階段を上がり、所々傷付いた赤褐色の扉を開けると、真正面の店の真ん中に、ドーナツ型の大きな檜のテーブルがあった。内側が底上げされた囲炉裏になっていて、そこに数本の薪がくべられ、オレンジ色した炎が暗めの店内をほのぼのと照らしていた。突き当りの窓際には、二人掛けの席が並んで三つあり、そこからテラス越しに見える琵琶湖が、新雪で薄化粧した比良山(ひらさん)系を背景に、のんびりと横たわっていた。山の白い稜線が水色の空にくっきりと浮かび上がり、その淡いブルーは、天空に向かうに従って塗り重ねるように濃く、深くなってゆき、やがて紺碧の空に仕上がっていった。山裾の溶ける積雪が立ち上げる蒸気で、中腹あたりまで微かに山肌を透かした霧がかかり、まるで異次元から突然現れた島が宙に浮いているように見えた。

「お決まりですか」

肌の色艶の割りに、前髪の流し方がやけに若いウエイトレスがぶっきらぼうに声を掛けた。客の女は窓に映る景色を見ていたが、何も聞こえなかったかのように、傍のクラッチバッグから震える携帯を取り出した。着歴を確認すると、徐に顔を上げて、表情の変化の少ないウエイトレス

を注意深く見つめた。

「……ケーキセット」

「珈琲は、ホットでよろしいですか」

抑揚の全くない口調でウェイトレスが訊いた。女は再び外の風景に目をやりながら、小さく頷いた。ウェイトレスは、来る時より速い足取りで厨房の奥に引っ込んで行った。

昔よく来ていたとき、いつも笑顔で迎えてくれた主人らしき中年の女性が懐かしかった。テーブルの上の携帯を取り直し、中を開けてメールを確かめた。

……しばらく、女は画面の文字を追っていた。そしてふっと息を吹き出し、窓と反対の出入り口を、何かを思い出すかのように眺め出した。

平日のせい、昼時だというのに店内は空いていた。中心にある大テーブルには、主婦らしき女性グループが五人、テーブルを挟んで座っている。片側の二人が顔を見合わせて談笑しているのとは対照的に、向かい側の三人は手持ちぶさたのように沈黙を守っていた。

「ねえ、知ってる？富沢さん宅の奥さん、土曜の晩も帰って来なかったみたいよ。だって昨日の朝、あたしが散歩中家の前を通ったら、ご主人が庭で洗濯物を干していたもの」

サイドに花飾りの付いた眼鏡の位置を確かめながら、ひとりが言った。

「そう、そう、ウチも昨日のお昼頃、近くファミレスに行ってびっくり。若い男の子と一緒に食事をしてたわ。あれは絶対……」

横の太った女が得意そうに言うと、眼鏡の女が尖らせた口を挟む。

「でも、こんな近くで白昼堂々と、よくやれるもんねえー」

沈黙の三人の内の一人が、薄笑いを浮かべながら相づちを打っている。

「あたしならもっと年上のロマンスグレーのひとと、リッチなホテルかどこかで、バイキングランチにでも連れてって貰うわ」

あははっ、と膨れた頬に両手を付けて笑った。

「リッチなバイキング？ちっともリッチじゃないじゃない。結局食べ放題ってことでしょ。ナカイらしいなー」

鼻息とともにもう一度吹き出した。

窓際に座っていた女は、そんな会話を訊くともなく聞いていた。そして一瞬、薄笑いしていた主婦と目が合った。主婦は申し訳なさそうな顔をしたが、すぐに笑いの水溜まりに目を落とした。女は怪訝そうに眉を寄せた。――どこかで見た顔だ。それが最近のことなのか、ずっと前なのか、よくは思い出せない。でも脳裏にこそぼゆい感覚が残る。底流に淀んでいるものを、額の中心で掬い上げようと神経を集中するが、喉元まで迫り上がってはすりりと滑り落ちてしまう。

再び確かめようと視線を戻すが、こんどは前の中心の二人の動きに隠れてその顔がよく見えない。女の頭が痺れるように疲れ始めた時、テーブルに珈琲とケーキが運ばれてきた。

白い洋皿に、網目のキャラメルソースが描かれ、その上にホイップとミントの葉がお決まりのように飾ってあるチーズケーキが、女の思考を束の間中断させた。挽き立ての珈琲の香ばしい煙と、昔はメニューには無かったケーキのコントラストが、女の心象に空いていた時間の重みを持ち運んで来た。

「ありがとうございました」

使い古しの言葉を背中で見ながら、女は店を出た。階段を下り、駐車場の端の桜の木の下まで歩いて行った。そこまで来てやっと、店内から漏れていた先ほどの主婦達の甲高い笑い声が途絶え、ほっとすると、目の前の琵琶湖の水に、光彩が揺らめいていた。

あの日も、確かこんな鮮やかな光が、湖面からこの場所付近一帯を敷き詰めていた。あれからすでに十年の歳月が流れていた。時の流れは不思議だ。今ここに立っている自分と、過去に立っていた自分の間にある目に見えない時間。見上げた桜の枝先に春を待つ蕾も、毎年湖面から吹き荒ぶ寒風に耐えてきたことだろう。それとこの十年、自分が越えてきた季節の長さや重さに比べると、違いはあるのだろうか。見渡す山並みや湖、大空、自分を支えるこの大地、それらを照らし出す太陽は、あれから何か変わったのだろうか。

今出てきた店や眼下に広がる小さな砂浜は、所々人為的な変化が見受けられたが、周囲の自然の景色に違和感を感じられなかった。まるで悠久の時の流れに身を置く大自然から見れば、一瞬のような時を過ごしてきた自分を見下ろされている気がした。

――神聖なる場所……。

女は懐かしそうに小さく呟いた。それがこの小さな岬の呼び名だった。

十年前のある日、恵は出会って間が無いある男を捜して白色のセダンのタイヤを擦り減らせ

て走り回っていた。男の家の周辺は、すでに何度も往復していたし、よく行くパチンコ屋も何軒か見て回った。待ち合わせ場所に使っていた神社の駐車場や、公園、思い当たるあらゆる所へ行って見たが何処にも居なかった。

その男と出会ったのは二ヶ月前だった。女の働いていたカフェバーに、友人と二人で来店した。二十代前半に見えたその彼らが、店の玄関前で入店するのを躊躇していたのを、二階の店舗から下の同じ経営のカラオケ店にたまたま降りて来たときに、窓から発見した。店内と外の温度差により曇りがかった硝子越しに、がたいが大きな方の男の目と女の好奇に輝く目が一瞬合わさった。

女は、表に出て料金システムや、安価な店のボトルがあることなどを説明した後、二人を店内に案内した。そろそろ忙しくなる時間帯だったが、十卓以上も有るテーブル席の大きく薄暗いフロアに、比較的客が少なかったので、L字型の幅広で、高級な白っぽい天然木で出来たカウンターの客はマスターと同僚の女の子に任せて、自分はフロアの客に目を配らせながら、呼び込んだ責任を感じてボックスに座った二人を接待した。

おしぼりを広げてから渡したり、アイスベルから氷をグラスに入れて水割りを作ってやったりと、普段することのないスナックのようなサービスをソファーと一緒に座っている内に、話が盛り上がっていった。

既婚者であった女は、オープン直後の店であり、働き始めて間が無く、未経験のこの仕事で自分より若いであろう男達と接するのが堪らなく楽しかった。早く結婚して、子育てに追われている内に、気がつけば三十歳をとうに越えていた。何か、青春時代にやり残してしまったことを足早に取り戻すような気分になっていた。

しかし、この店はアダルトでお洒落っぽい客層を狙っていて、アラサーのマスターがそれ以外の雰囲気客が来ると、あからさまに嫌な態度を取った。目の前の男達は、まさにそのファクターを備えていた。

しかし女は、そんな二人を眺めながらぼっとする思いだった。いつも気を遣う、堅苦しいエリートか、小難しく社会問題やファッションや、金持ちにしか出来ないような娯楽の話ばかりする自称イケメンの客ばかりを相手に辟易していた。

その点、この二人なら、気楽で素の自分で居られた。飾りっ気の無い、気の抜けたような冗談も、下手だが素朴で温もりが感じられた。ずっと前からの友人のようにすぐに打ち解けられた。

「明日、一緒にカラオケに行かへん？」

そんな軽い誘いにも自然に頷いていた。

それがきっかけだった。大きながたいの方の男が、その日から女の店に通い始め、熱い視線を投げつけた。誘われる度に、カラオケに行ったときと同じ乗りで食事や映画、ドライブに付き合った。

最初、女は取り戻した青春を楽しむかのように、ただの友人として男との時間を謳歌した。だが、次第に高まる相手の感情を意識し始めてから、少し身構えるようになった。自分は既に結婚し子供もいて、ある一線は越えられるものでは無かった。しかし、男と過ごす時間はそんな現実を忘れさせるのに十分な魔力を持っていた。そして惰性に陥った人生の穴を、自分を求めてくれている男の愛情が埋めてくれる気がした。

真直ぐで、直向きな若き情熱が、自己防衛のために作られた脆い壁を突き崩すのにさして時間は掛からなかった。店の勤めを終えた女は、約束通り、駐車場で待っていた男の白色のスポーツカーの車の助手席に、細く長い脚を滑らせた。

何処へ行くとも無く、国道に車を走らせた。町並みが途切れ、暗い森や田畑が続いていた道路沿いに、ぽっかりと、童話の世界に出てくるような赤い屋根に白い壁の城が、闇の中に派手な横文字のイルミネーションと共に浮かび上がっていた。

ビニール製の大きな、地面にすれすれまで伸びた暖簾を潜り、城域内の庭をしばらく徐行すると、幾つも並んだ入り口の端に男は静かに車を停めた。

エンジンが切られると、車内に沈黙が流れた。二人の息遣いと胸の鼓動が次第に高まり、堪えていたものが、今夜の星のように今にも零れ落ちそうだった。

「このままじゃ、切なくて……」

男が、俯きながら呟いた。

「――なにが？」

女は言いながら、自分の狡い言い方に気づいていた。

「もう、毎日が苦しくて耐え切れないんや。恵ちゃんのことをずっと頭から離れずに、飯もろく

に食えないし、じっとしていると気がおかしくなりそうで、いてもたってもいられない感じなんや」

女は、母親の様な目になった。自分のことを、こんなに好いてくれて、悩んでいる男のことが、堪らなく愛おしく思えてきた。それは異性に対する感情というよりも、母性本能を擦られたときの母親の感情に近かった。

再び沈黙が、何かを語りかけるように二人の間を彷徨っていた。

「――恵ちゃんが欲しい」

男は、躊躇いながらそう言って、憧れへと繋がる仄暗いホテルの入り口を見つめた。女は宙を見つめ、感情の振り子の振幅が見る見る内に増幅して、最大変位点で停止したのを込み上げる別の本能と共に認識した。

「切ないから、あたしを抱きたいの？そんなのはいや」

女が発した熱を帯びた沈黙が、触れられぬほど辺りを焦がした。

「――好きやから……。恵ちゃんのことを心の底から愛おしいから」

「嬉しい……。それならあたしも拓ちゃんに抱かれたい……」

ホテルのソファーに二人は並んで腰掛け、備え付けの冷蔵庫から出してきた瓶ビールを、恵は拓斗の持つグラスに注いだ。二杯目のお替わりを継ぎ足そうとする手を止めて、拓斗は素早く恵の唇を塞いだ。反射的に閉じた瞼の奥に、恵は夫では無く子供達の顔を思い浮かべていた。だが、拓斗のぎこちない口付けに次第に遠く意識とともに映像がぼやけ、やがて完全に消え去っていった。拓斗は唇を離すと、その細く可憐な脚を抱えて、身体ごと自分の膝の上に乗せた。恵の両手が脈打つ男の首筋に廻され、胸に頬を埋めた。淡く甘い髪の香りが、拓斗の鼻を擦った。恵はその胸に頬ずりをしながら満足そうに微笑んだ。

「あー、幸せ。この胸はあたしだけの特等席ね。絶対誰にも貸してあげたら駄目だからね」

拓斗は、恵の髪を撫でながら充足感で一杯になっていた。恵が自分だけのものであることが、ようやく確かめられたことに喜び溢れる思いだった。どんなことがあっても、この寂しがり屋で甘えん坊の愛おしい命を守り、永遠に続く様に感じるこれからの人生を、一緒に歩き続けようと決心した。

「いつまでも、ずっとこうしていきたい」

恵の言葉に、その決意は使命感に昂ぶった。

拓斗はそのまま立ち上がると、思いの外軽い身体を、糊のよく利いた真っ白なシーツが敷かれたベッドの上にそっと横たわらせた。

偽りの恋は偽りであるだけに、真実に抗って燃え上がり貫こうと懸命に足掻く。最初の内は自分で自分に同情したり、周囲の同情を求めてしまうが、やがて世界には二人だけしかいないことに気づき、湖の底深く沈んだ真珠貝の内に幸御魂を探す。僅かな砂粒で真珠となるのを夢見る。

女が遠くを見つめていると、その横に一台のワゴン車が停まり、運転席から男が降りてきた。車のフロントを回り込み、女の前に立ち止まったが、降り注ぐ光線が、男の輪郭に碎かれ飛び散って、影を作っている。

「変わってないなあ」

背後の青空をくりぬいたような黒みがかった空間から、声がした。

女は声のする方を仰ぎ見たまま、影が形に変わるまで瞳孔が開くのを待った。やがて、ブラックホールに吸い込まれた時を見つめるように、女の瞼の裏にこの男の記憶の映像が浮かび上がり、瞼の表の実像と捲り返した。

「相変わらず、待たせるね。もう帰ろうかって思ってたわ」

言葉と裏腹に、女の瞳は、子供がおねだりした玩具を買って貰った時のように輝いていた。

「ごめん、ごめん。朝からお客さんがあって、なかなか帰らなかったんや」

昔なら苛立った変わらぬ言い訳が、今なら軽く受け止められた。

男の後ろに付いて、砂浜に続く石段を下りていった。小さな湾の形をした、わずか二、三十メートルほどの砂浜は、打ち上げられた小石がごろごろと転がっていた。長い年月を掛けて、対岸の比良山系からたどり着いた小石があるのでは無いかと、女は目を瞬かせた。所々、背後の山から枝分かれした水流にはっとして、慌てて飛び越えた。

直ぐ近くの湖面に、白や白と黒のツートンカラー、嘴の周りだけカーキ色のアヒルが十数羽、束の間の陽光に、時折、羽を広げていた。その羽は、ここの喫茶店の主に飼われている鳥らしく、空に向かって伸びることはなく、この場所で子供を育て、自分と家族を守るためにすぐに湖面に

閉じた。

前を歩く男の背中が、十年前より随分大きくなった気がした。それは何処かの誰かを背負う背中ではなく、もっと重いものを背負い込む、広くて厳しい威厳を感じさせた。

男は足を止め、女に振り向いた。

「恵ちゃん、ほんまに久し振りや。元気そうだけど、ちょっと痩せた？」

女の名前は恵といった。湖風に髪を掻きあげる横顔に、もう若くはないが、何処か少女のような面影を残した大人の女という印象がした。男の方は拓斗といった。三十七歳の年相応に見え、がたいの大きさの割に、あどけない顔を恵に向けている。たしか、恵の方が七つ上だったことを、拓斗は思い出していた。

恵は首を軽く振り、口元を緩めた。

「痩せたりするもんですか。ひどく寝れさせられたのは、拓ちゃんに付き合ってた時だけ。今はもう、ちょっぴりお腹も始めちゃってるわ」

ふっ、と声にならないため息混じりの自嘲の笑いが、拓斗の鼻から漏れた。

恵がいきなり拓斗から五歩ほど後ずさり、まじまじと見つめだした。そして、は一つと、大きなため息をついた。

「あー良かった。拓ちゃん、もう、おっさんになってるんじゃないかと思って心配だった。大丈夫、大丈夫。良かった、良かった」

拓斗は、変な気分になった。何が良かったのか。それではもし、自分ももっと太ってしまっていて、二重三重顎で、白髪交じりの薄禿頭だったら、恵はこの場から直ぐにでも逃げ去ったというのか。そんな人の自然変化の外見だけを見て、すべてを判断しても良いのかと、訊いてみた。

「そりゃあ、そうよ。」

肩を落とす拓斗を見て、恵はクスッと笑った。

「年相応ってものがあるわ。人生の色々を経験して、甘いも酸っぱいも味わって、燻し銀の魅力のような歳の取り方があるやん。まだ四十前の父っちゃん坊やじゃ、似合わないもの」

恵みはそう言うと、水際に歩み寄り、ベージュ色のスカートの裾を絡めて、身を屈めた。波打ち際に、小さな波が、琵琶湖の大きな波紋を伝えた。指先で、水面にうねりを作りながら、恵は上機嫌だった。

「まだ、冷たいね...水」

拓斗はそれには答えずに、恵の横にそっと寄り添い、比良連山を見渡した。

対岸の琵琶湖西側に、日本海との壁のように連なる山嶺は、丁度真ん中で割ったように、左側が比叡山、右側に比良山地と続いている。関西のアルプスと呼ばれるくらい、日本海から吹く寒気による積雪が、壮観な眺めをさらに演出していた。標高一千二百四十四メートルの武奈ヶ岳を筆頭に、比良岳、打見山、蓬萊山など一メートル級の山々が立ち並んでいて、そこから一気に琵琶湖へと急斜した断層崖が、早春に、比良八荒と言われる荒々しい季節風を吹き下ろす。しかし、この頃、晴れた夕暮れの景観は圧巻で、『比良の暮雪』として、近江八景図の一つに数えられている。

『雪晴るる比良の高嶺の夕暮れは花の盛りにすぐる春かな』

近江八景図の選定者、命名者である江戸初期の公家近衛信尹が、自らの水墨画へ添えた和歌である。寛永の三筆といわれた文化人をして、その筆を取らせたほどの美しさと言えよう。現在なら、春先に、琵琶湖大橋付近の菜の花畑から、カメラを構える大勢の人々の姿を見かけるが、まさにこの歌の心境を実感するに違いない。

もうじき、その風が吹こうとしていた。湖面の咽んだ蒸気が込み上げて、拓斗と恵の人生を再び重ね合わせ、激風が吹き荒ぼうとしていた。

1-2 天井の店で

「結婚したんだってね。淳ちゃんから聞いていたわ」

恵は薄笑いを浮かべながら、芸能人の話のようにさらりと言った。拓斗は、恵の顔の表情にちらっと目をやると、湖面を見つめた。

「ああ...、あれっ、淳ちゃんって、居酒屋の店やってたあの人やんな。でも確か、去年の夏、琵琶湖で溺れる我が子を助けた時に、自分の方が力尽きて亡くなられたんと違ったっけ」

急に恵の顔が曇った。

淳は、恵がオープンしたばかりのカフェバーに働いていた頃、知り合った店の臨時コック長だった。恵より三つほど年下だったが、仕事からプライベートのことまで、親身になって相談に乗ってくれる頼れる兄貴的な存在だった。開店当時、以前、マスターの親の店で世話になった関係上、しばらくの間応援に来ていた淳と一緒に働き出したのだが、淳は、マスターと気が合わず、ものの一週間も経たないうちにすぐに辞めてしまった。しかし、その後は店の常連になって恵を影に陽に応援していたのである。

その頃、淳は離婚したばかりだった。あまり繁盛しているとは言えない店をテナントとして切り盛りしていた淳に、妻の佳枝は、手助けしようとしないうばかりか、子供達の服を買うのは渋るくせに、自分だけは着飾って、毎夜の如く仲間達と、やれ飲み会だの、店が混む月末になると、営業員として勤めている保険会社の研修旅行だなどと、ほとんど家に居ることなく飛び歩いていた。

そして去年の春、決定的なことが起こった。佳枝が旅行中、淳は、店の休みを利用して、四月から小学生になる下の男の子のランドセルを見に行くのに、銀行でお金を下ろそうと通帳を見たら、半年前から、残高がずっと赤字になっている。月末に引き落とされるべき諸経費も、ずっと記入されていない。こつこつ貯めておいたつもりの預金は何処に行ったのか、明くる日の夜帰ってきた佳枝に詰め寄ると、最初しらばっくれていたが、ほとんどパチンコで擦ってしまったことを最期に認めた。

淳は、その夜、知り合ってから初めて、佳枝に暴力を振るった。階下の店には、バイトの大学生の男の子と、客が一人いたが、その二人がびっくりして天井を見上げた。狂ったように喚き散らしながら、ちゃぶ台をひっくり返し、散らかった灰皿やコップ、ビールの空瓶など、手に握ったものをすべて片っ端から、厚化粧の、もうすでに淳の知らない女に成り果てた佳枝にぶち投げ、五軒並んだ店のテナントみんなに聞こえるほどの大きな音を響かせた。

恵が店を辞め、そして拓斗と別れ、夫とも離婚後、意気銷沈して、京都に実母と一緒にマンションに住み始めた時、突然、淳から電話があり、恵を驚かせた。実母も、四度目の旦那との折り合いが悪く、もう七十歳近くになろうというのに、家を飛び出していた。そんな訳で、今後の生活の心配で思い悩んでいたときだけに、絶妙なタイミングだった。淳は、いつも恵が自分一人の力では、どうしようも無いことがあるときに、決まって連絡してきてくれる。

でも今回は、恵に予想も出来ない電話だった。京都に住むことにしたのは、何もかも全てを真っ

白な状態にして、誰も知る人の居ないところで、一からやり直そうと思ったのである。本当は、北海道か、沖縄に行こうと思っていたが、成人になったとはいえ、働き始めたばかりの長男の聡史と、来春、卒業を控えた大学三年生の恵美を置いては行けず、それなら、二人の住む滋賀と、実母達が暮らす奈良の両方共に近い京都に決めたのだ。しかし、その他の一切は、捨てて来たつもりだった。それ故、淳が変更した携帯番号を知っていたのが不思議だった。

「おう、そりゃ、不思議がるのも使用がないのう。まっ、ええがな。恵ちゃんの場合は、すぐ、俺んとこに情報が入って来るっちゅうことや」

淳の野太いしゃがれた声が、携帯の向こうで笑っている。ぽっちゃり型の中背に髪の毛はぼさぼさで、服装に無頓着なだらしなさがあったが、色黒で、腕っ節が強く、柔道二段の腰のどっしり落ち着いた硬派のイメージがした。根は優しくて人情味に溢れ、年下に慕われる兄貴肌だった。その厚い胸板に、悩み事を相談に乗って貰ったときなど、恵は何度、涙で濡れた顔を埋めたい衝動に駆られたことだろう。

待ち合わせは、京都駅ビルにした。その中の中華料理店に、淳の話では、まだ今の店を持つ前に勤めていた中華料理屋で、仕事を教えてやった後輩が、副料理長として働いているということで、一度行って見たかったらしい。京都駅の地下ポルタ街へは、買い物に何度か足を運んだことがあった恵だったが、ホテルの十五階にあるこの店は初めてだった。

東京に本店を持つ高級老舗店の敷居の高さに、恵は圧倒されたが、淳はジーンズにTシャツの格好で、何食わぬ顔をして赤い絨毯の上を闊歩している。ウェイターの案内に付いてホールに向かうと、木の柔らかさをイメージしたテーブルと椅子に、壁や柱は木目調で、壁枠に楕円形の笠を被ったスタンドが、落ち着いた光を落としていた。窓際の席からは、京都タワーは見えなかったが、京の街が一望出来た。

淳はザッとメニューブックに目を通すと、素直に、料理長お薦めのコース料理をオーダーした。ウェイターがメニューブックを下げ、立ち去って行くと、老眼のせいだったのか、先ほどまでの顰めっ面を急に緩め、恵を見てにっこり笑った。

「で、どうなんや。良い勤め口はもう見つかったんか」

恵は一寸伏し目がちになり、首を横に振った。

「京都やったら、贅沢言わなんたら、なんぼでもあるやろ。でも恵ちゃん、客商売は嫌やって言ってたもんなあ」

淳は、恵の表情の微妙な動きを見逃さないように目を向ける。恵はその視線に気づくと、自分を励ますときの笑顔で、顔を上げた。淳と居ると、いつも無邪気な子供のようになれた。甘え易いオーラを、淳はいつも発していたといえる。それは、一緒に居ればいるほど、寂しく孤独な気分させられる拓斗とは正反対だった。拓斗は、自分の感情を、例えそれが恵に対する愛情であったとしても、相手のことを考えずに、思いつきのようにストレートにぶつけてきたが、淳の場合、その時その時の微妙な心の動きを、最初に察知してからで無いと、決して自分の意見を口に出すことはなかった。だから、淳からどんなにきつい助言を言われても、時に叱られても、恵が傷ついたことは一度も無かった。

先程と違う大学生のバイトのようなウェイターが、料理を運んできた。

「お待たせ致しました。特製冷菜の盛り合わせになります」

真っ白なテーブルクロスの上に、慎重な手つきで皿が置かれる。その手が微かに震えているのを、淳は懐かしい記憶とともに見つめていた。自分も、高校を出て、神戸の有名な大型中国料理店で皿洗いから修行を始めて、ようやくウェイターの仕事を任されたとき、緊張のあまり、料理を客の膝の上にひっくり返したことが、昨日のこのように脳裏に蘇ってきた。

グラスの水を口に運びながら恵は、窘めるような目つきでウェイターの後ろ姿を見送って、淳を見た。

「今の言い方って変よね。『～になります』って、未来形の言い回しじゃない？今あるものはそうじゃないもので、これからそのものになるのかしら」

淳は、クスッと笑った。

「恵ちゃんって、やっぱり掴み所の無い性格やな。急に哲学めいたことを言い出すんだから。わいはは頭悪いからよく分からんけど、ウチの店のバイトの大学生と、今のことについて議論を戦わせたことが在ったな。結論を先に言えば、どっちゃでもええやん、ってことやったわ。」

「えっ、どうしてよ。あたし、お母さんが小さい頃から言葉遣いにうるさくて、結構、最近の日本語の使い方のいい加減さが許せないの。それに実家のある奈良って、平安京の文化が、未だに何処か残っているところがあって、死んだおばあちゃんなんか、時々、全然意味の分からない昔の言葉で話していたことがあったわ」

「へー、そうなんや。やっぱり奈良って文化遺産が残っている古都なんや。でも文化遺産は、昔から残っているものを、現在も出来るだけ変わらないように保存するものやけど、言葉っていうものは、時代によってどんどん変化していくものやろ。今日本人が当たり前に使っている日本語は、元々決められた正しい文法なんて、多分無かったと思うから、後世の人が勝手に意味を跡づけしていくのとちゃうかな。それに、『うざい』とか、『ちょうびみょう』とか、平安京の時代の人が聞いたら、きっと、卒倒するんとちゃうか。逆にわいらが、タイムカプセルでその時代に戻って、人々の会話を聞いたとしたら、異郷の月を拝まなあかんで。うちのバイトの子に言わせたら、先の言葉を正しく言い直して、これは何々ですって、決めつけたような言い方されると、冷たい感じがするって言いよう。何々になるって言われる方が、可能性があって、期待が高まるって、訳の分からんこと言いよったな」

淳の説明を聞いていると、なるほど、と納得してしまうのが不思議だった。

「それにそんなん考えてたら、料理も冷めるで。味もな。おっと、これは冷たい内に食わなあかんにやったな。さあ、恵ちゃん、箸付けや」

そう言う淳の顔は何処までも優しく、恵の心の奥まで染み通る訛り言葉にも癒やされるのだった。でも、「愛」という言葉は、紛れもなく生きている言葉であるが、時代によって変わったり、誰かによって後を追うように意味づけされるのは我慢できないと、恵は思った。

次に運ばれた、湯気の立つふかひれスープは、汁というより、あんの効き過ぎた煮物という感じだった。お品書きを見ると、「国産ふかひれの姿煮込み野菜添え」と書いてあり、野菜好きの恵は、ふかひれの上に乗ったわずかばかりの青梗菜を恨めしく見つめるのだった。このドロドロ

した熱々のあんに、野菜を絡めたら、どんなに美味しいことだろう、と想像した。淳は、スプーンで掬ったそのあんを鼻先で嗅ぎ、口に入れた。

「やっぱり、一流の料理は、その土地土地の風土に染まりよう。京都は素材が本来持つ味を大切にしている。わいはやっぱり、田舎でしか商売出来ひんわ。恵ちゃん、味、薄うない？」

元来薄口の舌を持つ恵は、否定すると、淳は、がははっと笑った。

「やっぱり、恵ちゃんは、上品に出来とんのう」

この時ばかりは恵は、淳に反感を憶えた。夫とも、不倫相手とも別れ、成人した二人の子供に心配され、なおかつ、自分と同じように家を出てきた母親を抱えたこの身の何処が、上品だと言えるのか。いくら淳でも、今の追い詰められた自分の気持ちなど、分かるはずが無いと、この時に思った。

その後も、一皿食べ終えるたびに、タイミング良く次の一品が出てきた。中華料理のお決まりの北京ダッグをはじめ、魚介の炒め物、近江牛をかに棒に巻き、オイスターを効かせた贅沢な料理、韓国料理の参鶏湯を思わせる、雛鳥の腹腔に餅米を詰めたものを蒸し焼きにした一皿、フランス料理の手法を取り入れた車エビのココナッツクリームと、どれもこれも料理人の心と技を掛けた素晴らしい出来だった。

恵は、いつもながらに、淳の見掛けに寄らぬ食事の礼儀作法に感心し、見惚れていた。動きに無駄が無く、スムーズで、静かな時間の流れを醸し出していた。一流の料理人といっても、作る料理はいくら優れていようが、食事のエチケットのなっていない者もいる。その点、淳は凄いと、恵は思った。

最後に、中国茶と、中国菓子が持ち運ばれた。

「あっ、これあたしの好物なの」

「芝麻球...、昔前の店でよく作らされたなあ。あんの甘みやごま油の加減が結構難しくて、べちゃべちゃだと、揚げたときに爆発しちゃって、先輩にその熱々のつぶれた団子を、手の甲に押しつけられたりして、よく怒られたもんや」

「えー、熱そう。火傷しなかったの？」

「火傷なんて、日常茶飯事や。毎日、強烈な火力の前で中華鍋を振ってたから、火がお友達やったし、火傷は、握手した後の感触みたいなもんや」

恵の歯に、団子の周りにまぶされたごま粒がはじけ、生地のもちもちした食感が伝わると、続いて口の中いっぱい、揚げたてのごまの香りと、ほんのりとした甘みとコクが広がった。

「さすがに、この店のあんは、本格的やのう。代用でよくこしあんとか、さつまいもあんとかも使われるんやけど、黒ごまがたっぷり入っていて風味があるわ」

そう言う淳の口の周りに、ごま粒が点在しているのを、恵は指を指して笑った。

「甘いもの食べるときは、みんな子供に戻るね」

と言いながら、恵も自分の唇の割れ目をハンカチで拭った。

お茶を啜りながら、淳が急に神妙な顔つきになった。その間合いに恵は、少し不吉な予感が走ったが、直ぐ淳の穏やかな顔を見て、気持ちを切り替えた。

「.....実はわしな、先月、離婚したねん」

恵の瞼が、ぴくっと動いた。

「今日、その話をしようか、どうしようかと迷うとったんやけど、恵ちゃんの元気そうな顔見とったら、言っても良いかな、と思うた」

そう語る淳の瞳は、恵から視線を外していた。その話し方からは、いつも恵が相談に乗って貰うときの、あの落ち着いた、自信に溢れた雰囲気が見えなかった。恵が本当は今、かなりめげていることを、いつもならすぐに察知するのだが、その心の余裕が、淳にも無かったと言える。「もうなあ、力が抜けてもうたっちゅうか、仕事にも力が入らへん。どついてもうたんや。嫁さんに、一度も手を出したことがなかったのに、滅茶苦茶しばき倒してしもうたんや」

恵は何か言おうとしたが、それを遮るように、淳が話を続けた。

「ほんでなあ、とっとと出て行け、二度と帰ってくんなくて髪を掴んで、階段を引きづり下ろしたんや…。後で見たら、そこら中、あいつの髪の毛落ちとってな。それを下のぼんちが拾いようのを、上のぼんちが止めさせとったん見てたら、涙が出てきて止らなんだ」

淳が拳を握りしめて話すのを見て、恵は胸を締め付けられた。こんな悲しそうな淳を見るのは初めてだったし、家族の話すら、ほとんど聞いたことも無かったので、恵はどう言えば良いか、戸惑っていた。

「でもな、どうしても許せへんかったんや。確かに店も暇で、ずっとあいつには苦勞掛けてきて、保険屋に働きにやらせたんも、全部わしの甲斐性無さのせいやった。何か、おもしろくなかったんやろな。そんな暮らしが我慢出来ひんのやったんかのう」

それ以上、淳は話そうとはしなかった。お茶を飲み、まだ明るい昼下がりの京都の街を二人で眺めていた。厚いウィンドウ硝子と十五階の地上の位置によって、都会の音が遮られている。まるで天上の異空間にいるみたいに、日常の世界から隔離された錯覚を覚えた。このままのシチュエーションが、ずっと続いてくれたらいいのに、と刹那に恵は思った。過去も、今の生きて行くための重圧感も、全て忘れられれば、どんなに楽になれることだろう。淳も、きっと同じ心境に違いないはずだ。人に良すぎて、困っている人を見ればじっとしてられない淳は、その分、家族を顧みられなかったのかも知れない。外見では、礼儀作法や様々な人々への分け隔ての無い接し方も、何でも器用にこなしていたが、自分を含め、最も身近なものたちには、目が届かなかったのだろう。いや、本当は大切にしていたのだ。自分が心から愛している分、彼らもきっと自分を裏切ることは無いと固く信じていた。そこに油断と隙があった。どんな気持ちや想いも、言葉や態度で示さなければ、中々伝わるものではない。結局、淳も、実際は自分に対しても家族に対しても甘える気持ちがあったのだ。

その点、恵の場合は逆だった。彼女は自分の気持ちを一番大切にしていた。愛するより愛されることを求めている生き方は、時に、人を絶対許せない存在に決めつけ、多くの人間関係を断ち切る。相手から愛情を感じられなくなると、狂うほどの寂しさに、どうして良いか分からなくなり、それをまた他の人に求めてしまうのだ。そんな彼女が撒き散らす危険なフェロモンを愛情と勘違いして、言い寄ってくる男には事欠かなかった。だから、いつまで経っても、心が満たされることは決してなかった。そして、誰かを本気で愛したことが無かった。しかし、心の奥の奥のところで、「誰かを、何かを愛したい」という自分の真実の叫び声が、木魂しているのに気づ

きはしなかった。誰かに愛されていても、心底から安心ができないで、いつも疑心暗鬼になり寂しさが積もるばかりだった。

淳も恵も、人生に疲れ始めていた。どちらも、自分の思うようには行かない苛立ちと寂しさに泣いていた。中年に差し掛かり、若かった頃に思い描いていた虚像と現実のギャップに、まだ、新たに歩き出せないでいた。

「一緒になっちゃったね」

恵は、窓の外を見ている淳の横顔に、そう言うしかなかった。

1-3 淳ちゃんの壮絶なる死

――淳ちゃんが死んだ。

蒸し暑い晩夏の夕方、恵は、母親の夕食を作っていた。台所に点けっぱなしのテレビから、聞き覚えのある名前が流れた。恵は驚いて、映し出された水難事故のニュース映像に、思わず釘付けになった。画面の死亡者氏名の文字を食い入るように見つめた。「平井淳」……間違いなかった。場所は、滋賀県高島市マキノ町の海津大崎キャンプ場。琵琶湖湖岸の桜の通り抜けや、湖上の観覧船からの花見で有名な景勝地だ。一瞬、桜の花びらに埋もれた淳の亡骸が脳裏に過ぎった。だが、すぐにそれを打ち消す強い怒りを伴った感情が、腹の底から沸き上がった。

――そんな馬鹿なことがあるわけがない。だって、昨夜、星がきれいだって、電話で喋ったばかりじゃない。

キャンプ場から、深夜零時頃、恵に電話があったのだ。きっと何かの間違いだ。暑さだけじゃない、凍るような汗が、恵の首筋を伝った。

その報道番組は、全国各地の他の海や山の事故の概略を報せた後、今夜行われるナイター球場の中継に、直ぐに切り替わった。恵は、居ても立っても居られずに、手に持っていた菜箸を傍らのシンクに投げ出すと、慌ててテーブルに置いていた携帯を開き、淳と働いていた店のマスターの勇一に電話を繋いだ。淳と反目はしていたが、勇一の父親が淳の元親方にあたり、最も信頼を寄せていただけに、真っ先に連絡が入っていると反射的に思ったからだ。案の定、勇一は、事故のあらましを詳しく教えてくれた。

それによると、一昨日の水曜日の朝から、盆の代休で店を休み、アルバイトの大学生の小野寺とその彼女、それに淳の子供二人を連れて出掛けていたという。一晩だけテントに泊まって、昨日の朝には、帰る予定だった。淳もそのつもりで、テントを片付け始めていたという。ところが、滅多に遊びに連れて行ってもらったことのなかった子供達、特に下の政則が、まだ帰りたくないとぐずったのと、店の方も次の日の夕方から開ければ良かったので、一日延ばしたのだ。小野寺と彼女は、大学に野暮用があるとかで、その朝に先に帰って行った。

ここで、淳の運命が、大きく動き始めた。何でもない判断、選択が、良くも悪くもその人生を、大きく変えてしまうことがある。もしも…は人生には無いし、そう考えるのは無意味だという人も居るが、大切なものを失ってしまったとき、それに依拠しなければやり切れないというのが、人情というものだろう。

次の日の昼過ぎに、湖で遊んでいた子供が溺れるのを助けようとして、淳は金槌であったにもかかわらずに水に飛び込んで行って、子供を救い、自らは力尽きて湖底に沈んでいったという。遺体はまだ発見されていない。

その昼前、淳は、湖で遊んでいる子供達を横目に見ながら、片付けの終わったテントの傍で三脚に座り、缶ビールを飲んでいた。久し振りのアウトドアライフの三日目に、かなり疲れ切っていた。周りを見渡すと、近江八景のひとつとして、「海津大崎の岩礁」と言われるだけ在って、岩や大小の石が散在している。時折、背後の山と湖畔に挟まれた県道の、短いトンネルから抜け出た車が、すぐにまた同じようなトンネルに吸い込まれて行く。トンネルとトンネルの間に在る

ため、何も知らないでドライブしていたら、気づかないほど小さな湖畔のキャンプ場に残っていたのは、盆も過ぎたこともあってか、淳達だけであった。湖面は、べた凧で、左側に竹生島が遠く望めた。

小学五年生の芳紀が、弟の政則の面倒を見てくれていた。湖の辺で、水に入ったり、小石を積み上げたりして、普段見せたことの無い笑顔で奇声を発している。

――連れてきて、本当に良かったと、淳はほくそ笑み、一気にビールを飲み干した。考えてみれば、芳紀は別として、政則とこんな所に来たのは初めてだった。彼が生まれて以来、生活に追われ、季節の変化も気づかないまま、あっという間に小学校入学を迎えた。そして芳紀も、この春に、離婚してからわずかな間に、兄貴らしく政則に対するようになり、随分成長してくれたと、淳は嬉しかった。淳自身、これから男手ひとつで、息子達を育てる責任感と自覚は、日に日に強まっていたが、妻だった佳枝と別れてから、ふっと肩の荷が下りた気がしていた。それは、息子達を背負う同じ肩ではあったが、荷重のかかる位置と食い込み方が、まるで違っていた。痛みさえ感じられなかった身体が、やっと、息子達の一挙手一投足に反応し始めていた。

昨夜は、満天の星空を見上げながら、親子水入らずで色んな話をした。普段、店のことばかりで過ごしていた淳也は、静かで心を洗ってくれるような湖北の自然に身を委ね、景色の美しさばかりで無く子供達の心にも、磨り硝子を透かした視線とは違った、鮮明な空気を通して触れ合うことが出来た。芳紀もそんな父親に、密かに憧れている担任の女教師のことを素直に告白出来た。

「あー、あの先生な。父ちゃんもこの間、家庭訪問の時に始めてお会いした。いやあ一心が震えたー。ありゃあ優しそうで、超べっぴんさんやった。芳紀、お前も中々目が高いなあ」

「父ちゃん、知っとるけ。兄ちゃん、時々ラブレター書いとるの」

政則が、横から茶々を入れた。芳紀は顔を赤らめ、真剣になって怒り出した。

「政則！お前いつの間に盗み読みしたんや。兄ちゃんの机の抽斗の鍵開けたんか？」

千度問い詰められて、芳紀がゴミ箱に捨てた、書き損じの手紙を読んだことを白状した。淳は、二人が取っ組み合いの喧嘩をしても、一度も怒ったことがなかった。互いに年が離れているし、兄の方が、ちゃんと手加減くらい出来ると信じていたし、弟も、殴られた痛みを知ることが、将来、人の痛みを察せられる人間になるために良いと思っていた。だから、そんな二人を眺めながら、淳はいつも以上に楽しかった。

親子三人で静かな夜の湖畔に寝そべっていると、この広い世界に、自分たちだけが生存している気になった。視界の全てを占める星空と、暗い湖に浸食された心に、微かな波の音だけが、近くなのにやけに遠く響いている。身体から魂が遊離し、湖面をオーロラになって漂って行き、やがて水面に艶やかな残光を映しつつ、水中に溶けるように潜り、湖流に乗って、いつまでも周遊しそうになる。それは決して、物寂しい感じでは無く、何か満ち足りた、幸福の臭いがするものだった。また、親子の絆を深め、強める孤立感でもあった。

「なあ、父ちゃん。俺が小っちゃかった頃、よく話してくれた、怖い話をして」

芳紀が、甘えるような視線を淳に向けた。

「怖い話か。夜、車で走っているときによくやったなあ。うーん、昔、どんな話をしたっけ？」

「お婆さんが、足にしがみついていたやつ」

「おう、あれな。溺死の青年の遺体置き場に、一緒に泳いでいた友人達が確認にいったら、妙に長いシートが被せてあった。警察官が身元確認のために、それを頭の方からゆっくりと捲って行く。すぐにその本人であることが判明したが、さらにシートは捲られ、青年の膝下まで見えたときに、皆に戦慄が走った。その膝に、真っ白で長いぼさぼさの髪を振り乱した老婆が、ヒルのように必死にしがみついていた――という話やったのう。」

「そうそう、あれっ、今のちっとも怖くなかった」

「そりゃあ、この話はお前にせがまれて、何十回もしたやつやから、しゃあーないわ」

「でも昔は何回聞いても怖かった」

ふと政則を見ると、神妙な顔つきだ。淳は政則の頭を軽く小突いて、破顔した。

「何や、政則、もうびびっとんのか。ホンマはなあ、この話、稲川淳二のパクリやったんや。でも今からする話は、ほら、あそこに、見えるか…。竹生島に纏わるもっと怖い、父ちゃんが連れに聞いた実話や。覚悟してよう聞きや」

湖面の左側、漆黒の闇の中に確かにその島が不気味に浮かんでいた。

「この話は、本当にあった怖い話や。父ちゃんの知り合いが、この辺で昔から漁をしている爺さんから聞いたらしい。もちろん、十代から湖に出ている爺さんにとっちゃあ、竹生島の周囲一帯は庭みたいなもん。目を瞑ってても、船を出し、魚を捕るなんざ一朝飯前ってもんや。ところが、そんな爺さんでも、絶対に網を放り込まない『神の場所』と呼ばれる水域がある。それが今、闇の向こうに浮かぶあの島の西側。琵琶湖で一番深く、水深百メートル以上はある。対岸の東側、父ちゃんも昔登ったことがある山本山の頂上などから見た竹生島に沈む夕陽は、そりゃあ美しい。湖面も夕焼け色に染まるけど、爺さんにはそれが真っ赤な血の湖に見えて、震え上がるらしい。しかも裏側の『神の場所』の水の色は、どす黒い赤色で、湖底から流血が吹き出て来るように見えるというんや。近年、カワウが大量に住み着いて、そいつらが垂れる糞で、光合成が出来なくなって枯れた森林が目立つ島は、禿げ山みたいになってしまって、まるでテレビドラマで使われる殺人現場のような不気味さを保っている。その両方の景観が、ぞっとするロケーションを生み出していた。爺さんが若い頃、そんな迷信じみたもんなんか信じないで、そこに網を仕掛けてしもうた。網を引き上げようとすると、やけに重かった。こりゃあ、たんまに掛かる琵琶湖大ナマズか、オオサンショウウオかと思ひ、そのまんま巻いて行くと、いきなり、湖面にバシャーッ、と大きな波しぶきを上げ、黒っぽくでっかい人影が勢いよく飛び出してきた。そりゃあ、爺さんは、まだ若かったが、度肝と腰を抜かせるほど驚いた。爺さんは、恐る恐る目を凝らし、真っ赤な夕焼けに染まった人らしきものを見た」

いつのまにか座り直していた三人の背後を、乗用車が猛スピードでトンネルを抜け、再び突入していった。

「その姿は、一瞬立ち上がったかのように見えたけど、直ぐ倒れて、湖面に浮いていた。爺さんはしばらく、放心状態やったが、気を取り直し、それが動かないことを確かめようと、網を引いたり緩めたりしてみたんやけど、すでに網から離れているらしく、じっと動かへん。船を近づ

けると、真上から良く覗いてみた。それは鎧やった。戦国時代を思わせる古くぼろぼろの黒い鎧は、落ち武者の亡骸のようやった。でも何でこんな所に……、と思ったけど、みんなが噂していた落ち武者の幽霊がこれやと、直感した。夕陽の反射が眩しく、鎧を血のような色でぼやけさせ、鎧の所々の隙間から見える中身を良く確認出来ひんかったけど、やがてそれは、ぼこぼこ泡を立てながら、再び水中に沈んでいった」

芳紀は、淳の横顔を凝視したまま、両手を擦り合わせている。政則は、芳紀のシャツの袖を握りしめ、目を瞑って固まっていた。

「まあ、こんなところやけど、これは実話で、科学的な根拠もあるんやで。琵琶湖には、湖流と言って、海の潮の流れの様に一定の流れが深度八十メートルの層にある。この前、ニュースでやってたやろ。安曇川やったっけ、ボートの転覆事故があったのは。あれ、一人はライフジャケットを装着してて助かったけど、もう一人は無装着で見つからずに、途中で捜索中止になったやろ。そうした事故や、或いは殺人事件に巻き込まれて遺棄されたり、自殺者、行方不明者の死体が、湖流に乗って、永遠に回遊しているそうや。何でも、水深八十メートルいうたら、冷たくて、百年中二、三度の温度で、絶対、腐らんやて。それにその温度じゃ、琵琶湖に生息する魚や生物も、よう棲めへんで、食い荒らされることも無く、丁度ホルマリン漬けの動物みたいに、半永久保存できるって案配や。」

先までの話より、今の科学的な話の方が気色悪いと、芳紀は思いながら聞いていた。頭の中に、何十、何百もの鎧を着けた死体が、水中をぐるぐると回りながら漂っている姿が浮かんでいた。それは、苦しそうにも見えるが、規則的な一定の旋律に身を任せた死体が、まるで五線譜の枠の中のおたまじゃくしみたいに、上下を緩やかなラインを美しく描きながら流れて行った。

「それが、たまにその水中の層からはみ出す奴が居る。そのうちのひとりが、先の鎧を着た落ち武者や。でも、それにも理由があるんや。それはな、この湖国の自然がひとつの生命体で、色んな自然現象を緻密かつ、壮大に働かせているちゅうことよ。母なる湖は、一年に一度、大きな深呼吸をするのを知っているか？毎年、大体一月末から、二月に掛けて、まあ、最近では温暖化のせいもあって、三月までずれ込むときもあるらしいが、その頃、琵琶湖の酸素を十分に含んだ表層水が、寒気で冷えて、湖底に沈むと、酸素不足だった下層、中層の水と入れ替わって循環するらしい。それで湖底の溶存酸素濃度が一変に回復する。その現象を琵琶湖の深呼吸と、ある大学の教授が命名したそうや。中々詩的な名前やと思わへんか。」

友人から、この話を聞いたとき、淳はかなり興味を持ち、自分でも図書館の本を調べただけあって、かなり詳しくあった。ただ、異説、諸説はあるらしい。手にしていた缶ビールの酔いも手伝ってか、今夜はいつになく饒舌だった。その話に、芳紀はついて行けたが、まだ一年生の政則には、段々理解ができなくなり、一人置いてきぼりを食った気がしていた。

「それとなあ、春頃になると、比良山の雪解け水が川に流れ、琵琶湖に注ぐ。山の新鮮な酸素を一杯吸っている重くて冷たい水が、一気に底流の砂を押し上げて、生まれ変わるんや。その時に、対流が起こり、長い間閉じ込められていた暗く冷たい層から、奇跡的に抜け出せる奴が居る。この二つの大自然現象のいずれかによって、落ち武者は、比較的浅い水中をウロウロ浮遊し始める訳やが、急激な水温の上昇によって、みるみる腐乱していく。やがて身体中に腐るほどガスが

溜り、飽和状態を越えると、水中から湖面を目指して一気に上昇し、積年の想いを晴らすかのように、娑婆に飛び出すってことや」

言いながら、淳は自分の身体が一瞬ぶるっと震えたのを子供達に悟られまいと、缶ビールを持つ手を口元に上げた。苦い一口だった。芳紀は、それに気づかなかった振りをして、淳に尋ねた。

「でも、何百年も暗く冷たい湖底に沈んでいて、やっと水上に出られたのにすぐ沈むんじゃ、余計に悲しいのとちゃうの？」

「うむ……、でも父ちゃんは思う…。その頃丁度、比良八荒という、湖国や京の都に本格的な春の訪れを報せる強い風が、比良山地から琵琶湖に落ちる急斜面を駆け下りてくる。湖面を浮遊していた鎧を脱いだ落ち武者の靈魂が、その風に乗って自分の古里へ帰るんじゃないかなあ」

「帰ってどうするの？もう、知っている人も居ない浦島状態で」

「うーん……」

芳紀の鋭い突っ込みに、淳は窮してしまった。

その後、テントに戻り、子供達が寝静まると、淳は携帯と新しい缶ビールを持って外に出た。この所、店が終わった夜中に恵に電話することが多かった。何を話すわけでも無かったが、無性に声を聞きたくなるのだった。子供達とコミュニケーションが取れた満足感と、自然の中の開放感で溢れる思いを、恵に伝えたかった。彼女の仕事も朝早くからではなかったもので、いつも心地よく電話口に出てくれた。テントの頭上の、腐りかけて今にも崩れそうな古ぼけた街灯に、岩にしがみついた苔が、そこだけ薄緑色に鈍く光っていた。それに愛しい目をやりながら、淳は携帯の呼び出し音を耳に押し当てていた。

「はい、もしもし」

恵のウエットな声が、淳の頭の真ん中で反響した。

「やあ、恵ちゃん…。」

「あれっ、また随分と飲んだでしょう。今日は、みんなでキャンプじゃなかったっけ。」

淳の少し舌が纏れた喋り方を、恵はからかった。

「そう、最高の気分や。芳紀達も喜んでくれているし、久々に、ゆっくり、羽を伸ばさせて貰っている。どうや、この間言ってたネズミ講の仕事、引き受けたんか？」

今月の頭頃、京都の居酒屋で飲んでいたときに、恵から、知人から紹介されたと聞いていた仕事のことである。その業界で、今話題になっていて、社長はボランティア精神が旺盛で、利益の何割かは各種団体に寄付に廻している人と、恵が熱っぽく語っていた。淳も以前、友人から別のよく似たやり方の会社に入るようにしつこく誘われて、結局断った経験があった。しかし、その後、その友人との付き合いが疎遠になってしまった。それだけの友情だったと割り切るほど、淳はクールな性格では無かった。だから、恵がその会社を勧める知人の言われるがままに洗脳されていくのが、気が気でなかったのである。だが、大学に通う恵美の学費は別れた元夫が出し、聡史は働き始めたとはいえ、母親の面倒と、子供達に甘えるつもりの無い自分のこれからの生活費、もっと言えば、老後の蓄えを捻出しなければならない恵が、販売成績次第で高収入になると喧伝される仕事に、心が動くのも無理からぬことに思えた。

「ネズミ講とちゃうで。あたしもそれなりにちゃんと調べたんやから。淳ちゃんも一緒にやってみいひん。商売しながら入っている人も多いみたいやし」

淳は、言葉を返そうとしたが、喉の奥に飲み込んだ。渋い味が残った。あのときの友人と同じ口調だった。淳は、深緑色の苔から眼を逸らすと、満天の星空を見上げた。そして、高校時代の恩師の言葉を思い出していた。

――宇宙の星から見たら、人間っていうのは、ひどく小っちゃいもんなんや。

ふいに一陣の風が、竹生島の方角から湖面を揺るがせ、砂を巻き上げながら吹いてきた。砂に痛む眼を半開きにしながら、携帯の向こうで息巻く恵の声に吹き返す様に、淳は囁くように話し掛けた。

「……星が、きれいや。恵ちゃん、星が恐ろしいほど綺麗に煌めいているで」

そんな昨夜のことを思い出しながら、淳は近くの岩に目をやった。岩の縁の窪みに青い袋の煙草と百円ライターが落ちている。小野寺が忘れていったものらしい。淳は三脚に座ったままで、届くか届かないかの位置に右手を大きく伸ばし、目当てのものを手繰寄せた。迷うこと無く、煙草に火を点けると、その煙を肺の中一杯に吸い込んだ。途端に咳き込み、指の間から火の付いたままの煙草が、湖面のは方へコロコロ転がっていった。しばらく咽んでいたが、やがて収まると、波打ち際のぎりぎりですまった煙草を、テントの出し入れなどで痛みを感じていた、重い腰を持ち上げて拾いにいった。止めてから四年振りの一服だった。はじめて禁煙を破ったことに、後悔や後ろめたさは、不思議なくらいにまるでなかった。むしろ、懐かしい友人に会った時みたいに、少しの戸惑いと、照れくさはあったものの、すぐに打ち解け合えた感じで、二服目からは、じっくりとその味を満喫した。

「父ちゃん！」

いきなり、晴天の霹靂のような、凄まじい芳紀の叫び声がした。見ると、先程まで湖に入ったり出たりして遊んでいた政則が、畔から十メートル位のところで、手足をばしゃ、ばしゃと激しくばたつかせ、水を飛び散らせながら溺れているではないか。芳紀が、助けようと泳ぎながら手を伸ばした。政則は必死になってその手を取ると、芳紀の身体にしがみついてきた。芳紀は何とか岸に向かって泳ごうとするが、恐ろしい程の力で脇の下に抱きついてくる政則が障害になって、身動きが取れず、段々政則が岩のように重くなっていく。遂に堪えきれずに、ふたり、纏れるようにして水中に沈み始めた。水の中は、驚くほど透き通っていた。あっちこっちにちぎれて浮游しているコカナダモが芳紀の眼前を掠めた。

――このまま、死ぬんやろか。芳紀は、生まれて初めて死を意識した。意識しながら、音も無く透明で、政則が吐き出す泡粒が水中に届く陽の光に輝くのを、もう一人の自分が冷静に見ているのを感じた。藻の群生した湖底が足元に近づく。何か得体の知れない化け物の棲む所に思えて、ひどく気味が悪く、幾分自由な両足を漕いで上へ逃げようとするが、二進も三進もいかない。

その時だ。ごっつい、力に溢れた淳の腕が、二人の身体を割って引き離し、水面へ引き上げてくれた。水上の空気を力一杯吸い込んだ芳紀は、岸に向かって泳いだ。すぐに浅瀬になり足が着いた。振り返ると、淳が政則を、丁度バタ足の練習でビート板を突き出すようにこちらへ運んでいる。芳紀が手を伸ばすと、父親の鬼のような形相に仰天した。濡れているはずの髪は逆立ち、

かっと思を開き、齒を食いしばり、赤黒く、全精力を込めた必死の顔だった。

ようやく芳紀が政則の手をしっかりと掴むと、それを確かめた淳は、芳紀の目を見つめ、一瞬ほほを緩めた。

「兄ちゃん、頼んだで」

そう言うと、淳の身体は、引き波に吸い込まれるようにして、湖面から姿を消した。泳げなかった筈なのに、父親の必死の一念が、子供達の命を救った。

芳紀は、泣きじゃくる政則をぎゅっと抱き寄せて、淳を飲んだ湖面に浮き出す泡を見つめ、力の限り岸に向かって助けを呼んだ。旅館が一軒建っていたが、誰も気づいてくれないし、車が通っても、クーラーで締め切った窓の向こうに届くはずがなかった。

服を着たままの淳の身体は、自力では上がれないほど重くなっていた。しかも、水を大量に含んでしまったジーンズを履いていたし、昨夜からの飲酒と、四年振りに吸った煙草が、正常な身体の動作を阻害していた。何かに、足を引っ張られているような感覚だった。次第に薄れていく意識の中で目に映ったのは、水面をゆらゆらと揺らめく太陽の光だった。綺麗だった。不思議と、息の出来ない苦しさを感じなかった。その代わりに、自分の人生が走馬燈のようにフラッシュバックし、淳の心を掻き乱した。それは、景色や情景といった具体的、視覚的な思い出では無く、感覚的な、心的に強く押し寄せてくる感情だった。子供の頃、母親の誕生日にお祝いの代わりに肩を揉んであげたこと、友達と喧嘩したこと、同級生の女の子に恋をしたこと、佳枝を泣かせたこと、子供達をかわいがってやれなかったこと、誰かに優しくして上げたことには満足した気分を憶え、逆に、誰かをいじめたり、傷付けたりしたことには、胸を締め付けられる思いがした。淳に纏わる虚飾が全て剥ぎ取られ、丸裸を晒していた。恵の微笑む顔が浮かんだ。佳枝の悲しむ顔とクロスした。芳紀と政則が笑っていた。……瞬間、どうしようもない悔恨の情が、狂ったように淳の心を支配した。

――まだ、死にたくない。もっと生きたい...、まだやりたいことが一杯ある。

光に輝く水面に向かって手を伸ばした。だが、淳の身体は湖底へと徐々に吸いこまれていった。そしてすべてが暗闇に包まれてしまった。

芳紀が見つめる湖面の泡が消えたとき、湖底からグウォーと低い唸り声を響かせて、琵琶湖が大きく深呼吸した。

1-4 再会

拓斗と恵は、傍らの岩に並んで座った。湖面が太陽を反射して揺らめいている。

「淳ちゃん、一度だけ一人で店に来てくれた」

ぽつりと拓斗が呟いた。恵が少し驚いた視線を向けた。

「へえー、そうだったんや。いつ頃？」

「恵ちゃんと別れて、暫く経ってから」

恵は、拓斗とのことで、淳に色々と相談に乗って貰っていた頃のことを思い出していた。自分の方から拓斗にさよならを告げ、強がっていたが、まだ未練が残っていたのを淳は見抜いていたのだ。だから、拓斗の経営する食堂へ様子を見に行ったのだろう。

「何か言ってた？」

「いや、別に。カウンターに一人で座って、黙って飲んでた。夜の忙しい時間帯だったし、挨拶もそこそこしか出来なくて。ただ、帰り間際、俺の顔をじっと見て何か言いたそうだったなあ」

拓斗もその頃すでに薄々気づいていた。淳が、恵のことを特別に想っていることを。

恵とまだ付き合い始めて間もない頃、二人で馴染みのスナックでグラスを傾けていると、淳が偶然ふらりと店に入ってきたことがあった。

「あれっ、ようー恵ちゃん。珍しい所で会うもんやのう」

カウンターの少し離れた椅子にどっかと腰を下ろした淳は、二人を見てにっこりと笑った。拓斗より少し年上のマスターが、淳のボトルとアイスを準備し、ロックグラスを滑らせて淳の前に差し出した。それを分厚い左手で受け取った淳は、慣れた手つきで氷とウイスキーをなみなみと注ぎ、ゆっくりと口に運ぶと半分程飲んだ。そして、恵に視線を向け、また微笑んだ。

「恵ちゃんの彼氏か？」

その顔を拓斗は真っ直ぐに見た。そこには、男同士にしか分からぬ微妙なニュアンスのある表情が浮かんでいた。

拓斗が淳と出会ったのは、その夜が最初だった。武骨で、口は悪いが、何処か憎めない愛嬌があった。恵を通じて知り合っていなければ、きっと友人になれた気がした。

恵は、はにかむように笑うとこっくりと頷いた。淳は無理に間を置かない様に、続けざまに話し掛けてきた。

「勇一の店、最近余計に客を選ぶようになってきているんとちゃうか。この前もやっさんが来たとき、ブランドものの服のメーカーの名前を知らないからって、えらく馬鹿にしたように笑いよったもんなあ。大体、田舎で商売しとるくせに、気取り過ぎなんよ。腹立つで」

恵も、その通りと相槌を打っている。

その後、淳は気を遣ったのか、恵から視線を外し、店のマスターと世間話を始めた。静かに演歌が流れる店内には、三人の客しかいなかった。この夜の、何処か生活に疲れている風に見えて、どっしりと強かな雰囲気臭わせながらウイスキーを燗る淳の姿を、拓斗は今でも良く憶えていた。

「あんな頑健そうに見えたのに」

湖に小石を放り投げながら拓斗が言った。

「でも、淳ちゃん、金槌だったんよ。それなのに、溺れる子供を救いに湖に飛び込んだの」

「そりゃあ、親だったら誰だって、いざとなれば自分の命を投げ出してでも子供を守ろうとするやろ。しゃあーないがな」

「ほら、また始まった。拓ちゃんの『しゃあーない』が」

「……」

「ほんとに仕方がないからそうすることって、ごく限られた時だと思うの。き・み・の場合は、いつも違っていた」

拓斗は、恵と別れる最後の電話で言われた言葉を思い出していた。それは恐らく生涯忘れることの出来ない一言だった。

——あんたは、まだまだ子供や！いつもしゃあない、しゃあないと言ってばかり。

当時、恵は、拓斗と居ればいつも悲しく、寂しくなった。出会ったばかりの頃の拓斗の自分に対する熱すぎるほどの情熱は、最早感じられなくなっていた。一緒に居ても、抱かれているときでさえ、虚しさばかりが募っていった。ほとんど毎日会っていたが、喧嘩して何日か会わない日が続く間は、ほっとして穏やかで居られることに自分で驚いた。それを別れの予感のように感じて、懸命に訴えていた恵の気持ちを、拓斗は今でも理解出来ないでいた。

「淳ちゃんは、大人やったわ。仕方無いことでも、それ以外の方法しかないのか、より良い選択肢は無いか、しっかりと吟味して、そしてそれが相手にとってベストなのか、ちゃんと考えられる人やった」

恵も小石を拾って、拓斗よりずっと遠くに投げ捨てた。

「あの時、あたしが怒って、拓ちゃんと別れたのは、約束を破ったこと、そのこと自体じゃあないの…」

——約束。あの頃、恵はやっと自分に向いた仕事を見つけたと思っていた。それまでは、飲み屋や派遣のコンパニオンなど、短時間で高収入な仕事を転々としていた。そのくせ、元々責任感が強い恵は、一見、気軽で簡単そうに見える接待業も、やってみれば実に奥が深く、自らの知識や常識、情報吸収量など、ありとあらゆる人間力が問われ、日頃から自己研鑽を怠れ無いことを、その道のプロであるベテランの先輩の姿からも、痛感させられた。だから、逆に長く続けられなかったと言える。

でも、そういう場を嫌悪していたかと言えば違う。そのジレンマを救ってくれるような仕事があったのだ。同じステージでありながら、スポットを浴びる役者ではなく、ローディー、つまり結婚式のカメラマンである。

最初に先輩に付いて式場での撮影を手伝ったときに、すぐにこれだっ、という実感が得られた。生身の人間と直接対するこれまでの仕事と違って、撮影は、カメラを媒体として間接的に被写体にとって最も華やかな人生の一コマに近接する。しかも、第三者として安全な高みに居られた。やっぱり、基本的に人間が好きだということに変わりは無かったのだが、その反動として、異常な位、傷つくことを恐れていた。その仕事をプロデュースする社長は、現場で先輩が撮るのを

真似て、恵が練習用に撮影したフィルムを見てえらく褒めてくれていた。花嫁、花婿、それに両方の両親の情感を上手く捉えた映像に仕上がっていると、オマージュしてくれた。それに気をよくしたこともあり、自分でもカメラを使って作品を作り、クライアントに喜んで貰うという仕事に遣り甲斐を見つけた恵は、俄然モチベーションを上げていた。

そして、いよいよ、彦根の結婚式場で初めて一人で仕事を任された恵は、不安もあったし、重いカメラや機材を駐車場から式場まで運ぶのを、淳に手伝って貰うことにした。ところが、待ち合わせ場所で約束の時間を過ぎても拓斗が来ない。ぎりぎりまで待って、慌てて式場に駆けつけたが、式はすでに始まっていた。会場に入るなり、重そうに荷物を引きずる恵の姿を見て、仲人の長ったらしい話に退屈していた参加者達が、奇異の眼差しを向けるとともに、揶揄した。花婿、花嫁の座っている壇上の傍らに、慌ててカメラを設置している途中で、仲居らしき中年女性が傍に来て、式に遅れてきたカメラマンは初めてだと呆れられた。もたつく手で途中から撮影を開始したが、後でクライアントに激怒されたことは言うまでも無い。会社も即刻首になってしまった。

次の日、神社前の樹齢何百年もの大木に隠れた広場に、何食わぬ顔でやってきた拓斗は、恵の車の助手席に乗り込むなり、大きな欠伸をした。

「昨日、パチンコで五万もやられちゃった。最近あの店、新装イベントも終わって、回収し出しやがったみたい」

恵は毒気を抜かれて、先までの泣きたいのか、怒りたいのか、相反し、入り交じった感情の捌け口を見失いそうになった。しかし、昂ぶる思いは抑えがたく、無理矢理にでも引き戻す必要があった。

「昨日、パチンコなんかしてたん？」

「あ、ああ」

瞬間、拓斗の背筋に悪寒が走った。恵の切れる前の声質は痛いほど知っている。

「約束、してたでしょ。」

拓斗には、思い出せない。でも思い出せないことを言うと、余計まずい気がした。

「あんなに恥を掻いたのは生まれて初めてやったわ。クライアントの一生に一度の大切な式を台無しにしてしまった。どんな思いで、あたしが遅れて式場に入っていったか分かる？」

恐ろしい程の怒りを眉間に集めて、恵が拓斗を睨んだ。その感情は、ほほを伝い、滴となって鼻から垂れた粘液と混ざり、怒りを吐き出す唇を濡らした。

「それで、何て？呑気にパチンコしてたって？」

嘘じゃない、本当に覚えが無い、拓斗は自分に言い聞かせる様に心の中で叫んでいた。

「あれだけ遅れない様になって、言ったじゃない。いつも待たされてきたけど、昨日は絶対に早く来てって、念を押して」

どうしたことなのか、拓斗は、ありったけの記憶力を総動員して、一昨日、恵と別れる前の状況を思い出そうとするが、そんな約束をした覚えが無い。狐に摘まれたか、狸に化かされた気分で恵の顔を見た。

そこにはすでに、何を言っても伝わらない、聞く耳を一切持たない恵の孤独な世界に入り込んでいたときの横顔があった。それは、恵が時折見せる病的な一面と言って良く、幼い頃に両親が離婚し、二つ下の妹との四人家族だったのがバラバラになって、親戚中を盪回しにされたことと、決して無縁では無かった。すぐに男を作って、娘二人を親戚に押しつけた母親を心底憎むことが出来なかったのは、時々、好きなお菓子や玩具を土産にぶら下げて顔を見に来る度に、優しくかったからだ。もう少し、生活が安定したら必ず迎えに来ると、親戚に頭を下げる母親の背中を、子供心に不憫に思いもした。だが、中々人に懐けない性格の恵は、親戚が厄介者として排除するように押しつけ合った為、余計に心を閉ざし、歪になり、誰にも笑顔を見せない子供になった。

今でも思い出すのは、母親の義兄の家に預かって貰っていた頃のこと。昼下がり、仲の良かった従妹の香奈恵と庭で遊んでいると、縁側に立った香奈恵の母親が香奈恵を呼んだ。しばらく、恵はひとりで砂遊びをしていたが、急にお腹が痛くなり、トイレへ行こうとした廊下の右側にあった台所の引き戸の隙間から、香奈恵が卓袱台でケーキをおいしそうに食べているのを目撃してしまった。当時、ケーキはかなり高級で、恵は今よりずっと小さかった頃、誕生日に一度だけ食べたきりだった。それ故余計に、同じ家で同じ生活を送っているながら、香奈恵とは別の世界に住んでいるのだという疎外感を、ひしひしと感じた。

その幼い日々の心象風景は、大人になって陽気に振る舞うことが出来るようになって、徐々に記憶の片隅に覆い隠された様に見えたが、恵の中の傷ついた幼い少女の心は、今も間違いなく、痼りとなって生き続けていたのである。

時に、我が儘とも映る異常な他者への拒絶反応は、恵自身にも覚知出来ていない、少女の心を護るために身に付けた処世術と言って良かった。しかし、傷ついたままの幼児期の心は、大人になった恵が悲しみに包まれたときに、救いを求めて、心の底流から怒りの砂となって、撒き散らそうとした。或いは、少女に戻った恵は、沈黙の底流の砂粒に凝縮し、自分でも、他人の手によっても抜け出せない層に独りぼっちで巡廻するかだった。

喉元に飛び出し掛けた怒りは、矛先を見失い、悲しみの中に沈んでいった。

思い詰めた拓斗の口がようやく動いた。

「……そんな約束、憶えてないで」

恵の全身から迸る蒸気に咽びかけた。

——ほんまにしらん。

拓斗は、息を飲む思いで、その空気が風に流されるのを祈った。

「まだ、言い訳をするのね」

「してへんもんは、してへんにゃから、しゃあない」

恵は呆れて、これ以上、この男に何を言っても無駄なのを悟った。その悟りは、今日まで、求め続け、信じたかった拓斗の愛が、実はまやかさに過ぎなかったことを証明するのに充分過ぎた。

「あんたは、まだまだ子供や！いつもしゃあない、しゃあないと言ってばかり。あほ」

拓斗の心に、真っ直ぐに墜ちた言葉は、巨大な溶けない氷雪となって、もどかしさを押し潰した。

拓斗を叩き出すように降ろした恵は、車のエンジンを吹かせ、その場を逃げるように走り去った。

これが、一見、あまりにも呆気ない二人の別れであった。同じ道と一緒に歩いていたようでありながら、全く違った景色を見ていたのだろう。異なる絵画を觀賞して、感想をいくら述べ合っても、歯車が噛み合う筈が無かった。何度も同じ立場を探してみたが、見つけれなかった。その焦燥感が、少しずつ二人を追い詰め、仲違いにして、別れという出口に安逸を見出したことは、自然の成り行きだったと言えなくも無かった。

拓斗に、自分の求める愛を満たされなかったばかりか、それ故に苦しんだ恵であったが、一方、拓斗も、出会って、本気で好きになり、しばらくして恵の口から人妻で在ることを告白され、悩み、苦しみ、迷いながら、それでも恵を愛したのである。心の奥に、罪の意識を感じながら、ずっと後ろめたかった。それよりも恵を離したくは無かったが、何処かに、何かに遠慮してきたことも事実であった。それが恵には、不満で、物足りなかったというのか。恵の影に、他の幾つもの影が寄り添うように伸びて、拓斗の影に絡みつき、捻り千切られる様な感覚を、何度も味わってもいた。もしこんな自分に子供が出来たら、その子供に裁かれる予感がしていた。父親がしてきたことを、自ら犠牲になって子供が演出し、贖罪を迫るだろう。拓斗には、勇気が無かったのだろうか。恵を力強く抱きしめ、手を引っ張り、奪い去る強引さに欠けてはいたが、人として越えてはならない一線で、踏ん張っていたのも事実である。真実の愛とはなにか。その愛に裏付けられた優しさとはどういうことなのか。そして、具体的にどう行動することが、恵を本当に愛せていることになるのか。また、その愛と、恵の求めている愛とは同一のものなのか、異質なもののなのか。拓斗は、その答えへのタトヌマンでもがき苦しんだ。

その頃の心境を、拓斗は詩にしていた。

忘れたくても 忘れられない

そんな夢がある

人は誰もひとり 旅を続けて行く

君と出会って 会う度ごとに

心惹かれている

たとえ君が彼を 想い続けていても

この心 君に届け

愛の言葉は この詩

思い出ばかりを 拾い集めて

生きてきた 今日まで

褪せた写真 もうどこかへ捨ててしまおう

君と二人で 新しい道を

歩き続けたい

終わりの無い道を 君を守って行きたい

この想い 君に届け
愛の言葉は この詩

これは拓斗が、恵と出会って間もない頃作った詩である。恋をする青年のまだ青い想いが、ストレートに表現されている。詩の中の「彼」とは、当時、旦那とは別に付き合っていた恵の恋人である。

その彼からも拓斗は、恵を奪った。そのときは、当然のように恵が独身だと信じていた。彼女の偽装に、早く気づいていれば、拓斗は恐らく、二重の厚い壁を乗り越えようとはしなかったであろう。

それが嘘ではないか、拓斗が薄々疑い始めたのは、実は、最初のデートのときに、拓斗の車の助手席に座り、挨拶をしながら笑った恵の横顔に刻まれた、目尻の細い何本かの皺を見たときだった。恵はじぶんの年齢を十歳も低く鯖を読んでいた。いつも夜しか会ったことがなく、午前中の明るい日差しに照らされた肌は、嘘をつけなかった。でも拓斗に確かめる術は無く、実際、少々の年齢など、気にならなかった。

だが、二十四歳と、三十一歳の年齢差は、会う度に、話し込むごとに真実を炙り出すものである。さらに、別の意味で、拓斗は不安になっていた。あれは、拓斗が時々バイトしていた運送屋のトラックに、恵を乗せて走っていたときのことだ。その頃には、もう二人の間には、友達以上の感情が芽生えていた。岐阜で、楽勝のパレット積みの荷物を降ろしての帰り道、彦根の佐和山の短いトンネルを潜り抜け、下り坂を走行中に、四トントラックの高い助手席に初めて乗ってご機嫌の恵の横顔を、拓斗は覗き込むように冗談半分で問いかけた。

「ひょっとして、結婚しているんとちゃうやろねえ」

恵は顔を赤らめ、持ってきていたピンク色のスヌーピーのクッションで目を覆った。拓斗は笑っていたが、心中は冷静でいられなかった。それを認めるには、時間的な間と、恵との距離感を必要としていた。今、直ぐ傍で、花のように香り、咲いている恵を前にして、これ以上詮索するほど、拓斗は大人でも無ければ、子供でも無かった。時が、わずかに進み過ぎていた。後戻りするには、背後が寒すぎた。

拓斗は、動揺する心を、また詩に託した。

忘れることしかない
そんな恋だった
断ち切れないこの想い
深く胸に沈めて
この場所で たった今
別れたところなのに
君の面影探してる
弱い弱いこの俺
昨日を抱きしめて

暮らして行くより
明日の灯を夢見て
生きて行きたい
グッドバイ マイ ラブ
どうか いつの日か
幸福を見つけて

二人の お気に入りの
あの店 もう行かない
君の笑顔 泣き顔が
甦るだけ
最後に 言えなかった
君に 贈る言葉
大切に 人生を
生きて行って欲しいと
このまま 二人だけの
時が 過ぎるなら
別れることなど
しなくてよかった
グッドバイ マイ ラブ
どうか いつの日にか
幸福を掴んで

拓斗は、泣きながら、自分に言い聞かせるつもりで、この詩にギターを使ってメロディーを付け、ひとり、歌った。

わずか三ヶ月程前、親友の有川裕次といつものように飲みに繰り出し、いい女がいる飲み屋を当てもなく探していた時、通りかかったカフェバーの窓を介して、そこで働いていた恵と初めて目と目が合ったあの夜を、拓斗は大分前の出来事のように思い出した。

いつの間に出来たのか知らぬ新しい店の前で、拓斗と裕次が物珍しそうに立ち尽くしていると、店の窓から二人の様子を見ていた恵が、店のエントランスから出てきて、輝くような笑顔で言った。

「いらっしゃいませ。ただ今開店イベント中で、サービス料金で営業しています。ここの一階は、別店舗で、カラオケルームになっています。良かったら、バーになっている二階へご案内します」

言葉遣いは丁寧だったが、顔の表情や仕草に、旧知の仲のような親しみやすさがあり、裕次が馴れ馴れしく揶揄った。

「彼女、わしらに付いてくれるの」

恵は、透かさず微笑みを浮かべ、頷いた。

拓斗は、にやつく裕次と目を合わせながら、ミニスカートの下にすらりと伸びた足を見上げながら、階段を上がった。ドアを開けると、でっかいカウンター越しの棚に、所狭しと並べられ、ライトアップによって燦然と光るボトルの数々が目に飛び込んできた。カウンターには、左から三人、五人、四人と、スーツ姿の男女の入り交じったグループが、少し間隔を開けながら座り、談笑しながらバーボンやカクテルに舌鼓を打っていた。BGMのレゲエ曲が、かなり大きめの音響で、カウンター以外は暗めの店内に、シャウトし、弾むように鳴り響いていた。田舎のバーにとしては、多すぎるほどの数のボックス席の中央に案内された拓斗達は、周りを見渡ししながら、場違いな雰囲気気まづい思いがしたが、恵が注文を取りに、裕次が沈んでいるソファの片隅に腰を下ろすと、一変して場が和んだ。適度によく喋り、よく笑い、よく飲み、愛想の良い二十代前半に見える恵は、ちょっと年上に当たる拓斗達を、大いに盛り上げてくれた。下戸の裕次は、超薄めの、拓斗はロックで店売りのバーボンを飲んだ。いつも安物の国産ウイスキーを飲んでいた二人は、バーボンは初めてだった。二杯目のグラスの途中で酔いが回るなんて、酒豪の拓斗にとっては想定外だった。

恵の他には、カウンターの向こうにアラサーのマスターと、恵と同じ年代に見える男と女が一人ずついた。カウンター横の小さなエレベーターからつまみや料理皿が昇降していたので、一階にカラオケルームの他に厨房があり、そこで働くコックが居るのが分かった。メニューを見ると、無国籍料理の居酒屋のような品揃えの中、中国料理店を母体に持つだけあって、その種の料理が多かった。小腹が減ってきた拓斗は、恵に頼んで、春巻きをオーダーした。

十分ほど待って、恵が運んできた春巻きが、加工品だったのに少しがっかりしたが、その一つを遠慮する恵の口に押し込んだ拓斗は、もう、恵を自分の心の中に受け入れていた。

次の日、約束して三人で隣町のカラオケ屋に行き、恵の歌うテレサ・テンの「時の流れに身をまかせて」の歌詞、『――貴方の色に染められ』に「俺が染めてやる」とばかりに、拓斗は勝手に自分を重ねて興奮していた。しかし、裕次と恵ばかりがあんまり楽しそうに喋るので、ふて腐れてひとりで歌ばかり歌っていた。そのまま彼女の職場へ飲みに行く車の中で、拓斗は、バックミラーに、舞い降りる夕闇の青とともに映る彼女に、恋していることに気づいた。

そして二、三日後、拓斗は裕次に抜け駆けして、定時制高校時代の同級生である高岡が店長をしている、関西では有名なデートスポット、神戸の須磨海岸沿いのカフェに恵を誘って、忘れられない一日を過ごした。太陽がまぶしく輝くテラス席に二人、向かい合った。都会の喧噪の臭いの混じった潮の香りのする浜風に、恵は髪をかき上げ、微笑んだ。白いペンキで塗られた木のテーブルに置いていた煙草を拓斗が咥えると、恵は拓斗の手からジッポを奪い取り、先端に火を付けた。

それから二人は、知っている人の誰もいない須磨海岸の砂浜を歩いた。初めのうちは、拓斗の二、三步後ろに恵は付いていった。やがて並んで、お喋りをし出し、海からの風が、段々、強くなった頃には、寄り添い合っていた。不意に恵が拓斗の肩にもたれ、手を握った。拓斗は一瞬驚き、頭に血が上る感覚がしたが、恵の冷たい手の温度が伝わってくると、土手っ腹に熱いものが舞い落ちて、次第に全身に隈無く拡がった。

拓斗の手.....温かい。でも、掌の温かい人は、昔から心が冷たいって言うんよ。夕暮れの潮風が、恵の髪の毛の香りを拓斗の鼻孔に運んだ。薄紅色の臭いがした。

――でも、この手がもし冷たかったら、誰が恵の掌を温めてやれるんや。

実際には、言葉は発せられてはいなかった。繋いだ手と手を通して、伝え合っていた。心と心が、何百、何千年振りに、やっと触れ合えた瞬間のような気が互いにしていた。

それから恵は、気障な台詞を言っていると言わんばかりに、悪戯っぽい潤んだ二重の大きな目を、拓斗の肩越しに向けた。

1-5 道楽

股間の一物の起立と共に目覚めた拓斗は、和式のトイレに屈み込んでから、十センチ位後ろにずれば、便器の周りに洪水を起し兼ねなかった。射程距離は、発射機のパワーと角度を計算に入れて算出しなければならない。それと後は、移動空間中の温度や風向き、風力なども大切な要素となろう。拓斗は、発車寸前の弾丸をこめかみに必死に堪えながらも、慎重に間合いを見定めてから、よし、と自らゴーサインを出した。堰を切った水は、この時ばかりに微かに弧を描きつつ勢いよく飛び出した。そして見事、比較的許容範囲の広い標的を仕留めたかのように思えたが、如何せん、発車直前に発射機がさらに角度を増したらしく、便器の頭を撫でながら、タイルの床に生温い液体が垂れ流れた。その汚水は、じわじわ生産元の足元へと戻って行った。

――まーた、やっちまった。拓斗は、今更ながらに自分の鈍くささに苦笑いした。人との距離感の取り方にも、それは言えた。人に対する思いや感情のボルテージ、つまりは期待感の角度が大き過ぎると、対象に届かないばかりか、自らを傷つける刃となって頭上から真逆さまに落ちてくることになりかねない。自己を抑制したり、角度を変えて人物を見定める余裕が、拓人には足りなかった。有り余るパワーに溢れてはいたが、第三者からは、彼の周りは不毛の荒野が果てしなく広がっているように見えた。そのおかげで今までどんなに間の悪い思いをしてきたことだろう。例えば、初めて会った人や目上の人に対して、気を遣うことをせずに、想ったことをそのまま伝えてしまうところがあった。本音と建て前を使い分けることが苦手だったと言って良い。そのくせ、後で傷ついていたのは本人で、いわば苦手な社交を隠すために、本音を言うことで、逆にカムフラージュしていたと言える。拓斗にも、傷ついた少年の心があったのだ。

拓斗は、トイレで目覚めの一服をやりながら、昨日の恵と過ごした一日を思い出して、溜息混じりの紫煙を吐き出した。カフェーに行き、砂浜を歩いて、三宮でぶらぶらしたまでは良かったのだが、帰りの高速代をケチって下道を走ったのがまずかった。大阪に入ってから、迷いに迷ってしまったのだ。田舎者の拓斗は、二車線以上の道路を走ったことはほとんど皆無だった。ところがなんだ、大阪の道路は。一般道のくせに、三車線、四車線、五車線まであるではないか。その上、立体的になっていて、二重、三重に交差し、走っている内にどちらが西か東か、さっぱり分からなくなってしまった。標識を見ても知らない地名ばかりで、拓斗はほとんど参ってしまった。今なら、カーナビという文明の利器があるが、当時は、山勘で道を走るのが、男のステータスシンボルみたいなところがあった。地図で調べるか、車を停めて誰かに聞けば良いのに、恵を横に乗せている都合上、意地を張って、それに男の見栄も手伝って、頑張ったが、それにも限界がある。二時間も大阪のままでは、ステータスも何もないだろう。ハンドルを握る手をべた付かせ、情けなさに俯き加減の目に入ったのが、環状線の標識だった。以前に利用したことがあったのだ。拓斗は、一瞬安堵した。これに乗りさえすれば、近畿道に接続し、名神吹田インターチェンジにたどり着けるはずだった。ところが、ここでもまた、循環地獄に捕まってしまうのである。

途中に、きっと標識があったはずなのだ。しかし、標識とそれが示す情報が多すぎ、その上、次から次へと分岐を繰り返し、しかも、複数線から大量の車が合流するため、停滞の波に飲まれ

ながら走るのがやっとの状態だった。慣れた大阪のドライバーのように、車線から車線を右に左に自由に変更出来なければ、たとえ標識を見つけたとしても、左右の分岐に入るのに、気づいてからの走行距離が短すぎた。

そうこうしているうちに、ハイウエーに夕陽が差し込んできた。

「……『道頓堀』、これで三回目よ。大丈夫なの？」

同じ標識ばかり続くので、恵が心配そうに声を掛けた。

「うん、何とか行けるやろ」

普通に答えてはいたが、顔が恥ずかしさで火照っていた。

「環状線やし、これ以上は間違わへんやろ。同じところ回ってるだけやし。何処かで、近畿道に入らなあかんねん」

ちらりと覗いた恵の顔に、憐れみが滲んでいるようだ。やがて、また先程の渋滞地帯に戻った。ゆっくりと速度を緩めると、前方の車との間に出来た隙間に、右側から黒いワゴン車が割り込んできた。

「こん畜生」

恵が囁くように言った。

「厚かましい奴。指示器も出さずに危ないやない」

「田舎と違うんで、それ位しないとまともに走れへんのやろ」

「そうなの？でも、大体車が多すぎるわ。この車だけなら、邪魔者もいないで、すんなり間違えずに行けるのにね。無数の分岐点でも、正しい判断が出来るのに。巻き込まれてしまったら、同じ所から抜け出せないで、永遠に回り続けてしまいそう」

「いや、抜けようとすれば、何処でも下りられるんだけど、その方が道に迷って、余計に時間を食っちゃいそうだから、みんな我慢している。ふっ、俺の姉貴もこの前、五周したんやで。そのときは、おれ、後ろに乗っていて、散々馬鹿にしたのになあ」

「それって、お姉さんに懺悔しているつもり？」

恵がマジな顔をして聞いてきた。

「そうとも言えるかな。迷っている人を蔑んではいけないってこと。誰もがみんな迷うし、恵ちゃんが言うように、迷っているときは、気づかないうちに同じ所を抜け出せないで、ぐるぐる回ってばかりいてしまう。でも、そうしている方が楽なんじゃないかも知れない」

恵は、拓斗をまじまじと見つめていた。そしてふっと溜息をついた。

「それって、恋や人生にも通じるわね。」

拓斗はにやりと笑って、右に指示器を出しながら車線を二本変更して、停滞区域から分岐線に抜けた。ようやく空いた道を、調子よく加速して行った。

「バイト先のベテラン運転手が言っていたっけ。自分の嫁さんに、あんたは道楽者や、いつも仕事をしながら道を楽しんでいるでしょって言われるんやて。でも、長年のトラック野郎でも、時間に追われて走るのは他の者と一緒やし、初めて行くところは道を間違えたり、新しい道に変わっていて迷うこともあるし、事故だって無いわけでは無いんや。大型に乗っていて、昔は給料も良かったらしいけれど、今は大型の仕事は特に減っていて、愚痴ばかり溢していた。でも止めら

れへん。他に出来る仕事もないけれど、それよりもやっぱりこの仕事が好き、トラックを運転することが、道を走るのが性に合っていると。そして突き詰めれば、嫁さんの言うとおりに、確かに道を楽しんでいるって言うていた」

——道が人生。雨の日も、嵐の日も、雪の日も体調が悪かろうが、事故ろうが、一度自分のトラックに積み込んだ荷物は、時間までに必ず目的地の荷主に届けなければならない。大袈裟に言えば、相手先の会社の社運や、個人の人生まで掛かっている荷物もあるのだ。その責任を担う自覚を本当に持っているのがプロだと、ベテラン運転手に拓斗は教わっていた。

「人生に決められた目的地と、時間もあるのかしら。命を懸けて届けなければならない荷物って、何なの。そんな眉間に皺を寄せて走るような生き方は、絶対嫌。あたしは、迷っていても良いから、毎日を平凡に、変わらない日常をのんびりと回り続けていたい」

気が抜けたように恵が笑った。

名神高速に入ると、日も完全に暮れ、トラックや車のヘッドランプが行き交う道を、拓斗は家路を急いだ。もう、抜け出せない道に入っていることを、ふたりはまだ気づいてはいなかった。そして、いつか抜け出して、互いに背負った重い荷物を、人生の最終章まで届けなければならないことにも、思いを馳せられ無かった。



湖面を睨み付けながら、恵は震える声で言った。

「淳ちゃんが、溺れて死んだことは、しゃあないことでは無い。誰も淳ちゃんの命を奪う権利などを持ってはいない。例えそれが、この琵琶湖だって……。子供の代わりに犠牲になったと言っても、そうさせたのは、一体何なの。何故、淳ちゃんが死ななければならなかったの？その理由が知りたい」

恵は語気を強めて言った。淳が無くなってから一人抱え込んでいた悲しみが、こんこんと湧き出るのを堪えきれなかったのだ。拓斗と出会った時より、さらに深く刻まれた目尻の皺が引き攀っていた。それを見ながら拓斗は、恵の中で、いかに淳の存在が大きかったのかを悟った。それ故、自分が言った軽薄な先程の言葉が、恵の傷口に触ったことを後悔した。拓斗がどこか他人事のように思っていた淳の死を、恵はまともに捉え、それを受け入れることの出来る理由を探していた。

実は、淳が死んだ次の日、人伝にそれを聞いた拓斗は、夕方店を抜け出して、淳の店に訪れていた。入り口の引き戸に手を掛けると、意外と簡単に開いた。その今も手に残る感触は、まるで拓斗が来るのを待っていたかのような軽さだった。店内は薄暗く、物音ひとつしなかった。入って直ぐ左側の狭い座敷を通り過ぎ、それに続く五人がけの和式カウンター横の細い通路を進むと、階段の下から二階に向けて、すみませんと、三回声を掛けた。澄ました耳の奥で、キーンと鼓膜が静寂に震えた。拓斗は振り返り、姿勢を正すと、綺麗に拭かれて艶のあるカウンター越しの狭い厨房に向かって、最敬礼した。右隅のガスレンジの上に吊られた、使い込まれた中華鍋が、今にもおいしい料理を作りたさそうに、主人の帰りを静かに待っていた。同じ調理師として、また、恵を通じて知り合っただけなのに、何か深い縁を感じさせられた心の友として、深く込み上げてくるものがあった。溢れ出ようとする感情を抑えきれず、気がつくと、嗚咽していた声が漏れだし、いつしか薄暗い店内には、拓斗の嘸り泣きが響いていた。それから、店を出た拓斗は、もう一度頭を下げ、持参した白色の百日草を入り口の脇にそっと供えた。その傍らには、誰が

置いたか、長方形のブリキの菓子箱の中に、淳の人柄を偲ぶように、弔いの言葉が書かれた店の客の手紙やカードが入っていた。剥き出しの文面を読んで、拓斗は余計に胸を締め付けられる思いだった。

淳ちゃん、空の上から見えますか？

いつものメンバー、みんな集まりました。

今週の土曜日も、淳ちゃんの店でみんなで飲む予定だったのよ。

あまりに突然のことで、信じられません。

いろいろ、相談にのってくれたこと、ありがとう。

でも、もっといっぱい教えて欲しかった。

ペーヤんも、こまちゃんも、さとりもとしおも、みんな泣いています。

でも、もう、会えないのですね。

淳ちゃんの優しいスマイルが、大好きでした。

いつまでもずっと忘れません。

淳ちゃんに誓ったこと、絶対守ります。

空の上から見ていて下さい。

さようなら、ほんとうにありがとう。

淳ちゃんへ

ちはる

馬鹿野郎！こんなのありかよ。俺は絶対許さねえ。裏切り者！約束破りやがって……。

一緒に甲子園に、阪神、巨人戦観にいこうと、ついこの間、約束したところじゃねえか。

そのあと、鶴橋で焼肉おごってくれるって言ってたのは、あれはうそだったのかよ。

このダスターが！俺は許さん。

義男

しかし、ひとの噂も七十五日、というのが、淳が亡くなって四十九日目の法要を待たずして、淳のことは、日常生活の他の多くのものと同様に、拓斗の意識の片隅に追いやられていった。恵によって、まるで重箱の隅で見失い掛けていた大切なことを、杓子で拗われたような気持ちにさせられた。それと同時に拓斗は何故か、子供を助け、その後湖底へと沈んで行く淳の姿を、ありありと想像することが出来た。

その顔は、決して苦痛に歪んではいなかった。淳の命が、政則の命を救うために、ただ単に犠牲になったのではなく、政則の命と共に永遠に生きて行こうとする、積極的な死だったということを感じさせる、荘厳な顔付きだった。

目の前の冬雪を被る比良連山の上に、三つの雲がぼっかりと浮かんでいる。置き石に座った拓斗の足元に、透き通った緩やかな波が押し寄せた。それは靴の爪先で止まって、静かに引いていった。その瞬間、自分が紛れもなく、無限の時間と空間のピンポイントにいることを意識した。大自然の大いなる循環の内に生かされているこの一瞬の点は、線に引き伸ばされ、面や球体にも変化することが出来た。混じりっ気の無い研ぎ澄まされた拓斗の耳に、微かに流れる水の音が聞こえてきた。拓斗は立ち上がり、音のする方へ歩いて行った。切り取られたばかりの長い生木の束が横たわる向こうに、崖の上方から、小さな滝が勢いよく、山からの水を直ぐ傍の琵琶湖に落としていた。

「恵ちゃん、こんな所に滝があるで。昔からあったっけ？」

恵が不思議そうな表情をして近づいた。

「あら、本当。たぶん、無かったと思う。ほら、前に元旦に、二人でここでバーベキューをしたことがあったじゃない。あたしがおせちを作って持ってきたとき、ちょうどこの辺でははずだけど、何も無かったと思うわ」

「じゃあ、自然に出来たんやろか。それとも、ここの主が、作ったのかもな。あの親父さん、店の周りやこの砂浜の整備をまめにやっておられるもんなあ」

拓斗は、そう言って、店舗の方を見上げた。その下のスペースには、親父さんが山から取ってきた木を薪にしたものが、びっしりとストックしてあった。店内の囲炉裏に使うためであろう。その右横の丸太木の階段の周りには、様々な木や花が植えられていて、季節ごとに花が咲き、実が実り、訪れる人々の目を楽しませていた。丁度この季節は、夏みかんが実を付ける時期で、まだ柚子ほどの大きさだが、夏が近づくに連れて、一回りも二回りも成長して、熟れて行くことだ

ろう。

身の回りの全てのことが、何かのサジェスションを与えてくれていることに、拓斗は薄々感付き始めていた。十代より二十代、そして今、三十代後半になって、今まで本当の意味で見えていなかった身近なものが、大切なことに想えてきたのだ。

拓斗と並んで流れる滝の水を見ていた恵が、独り言のように言った。

「こんな小さな滝や川や、大きな川、全ての河川からの水を、この湖は受け入れているのやね。淳ちゃんも」

拓斗は何か言いかけたが、喉に貯め、この男には珍しく、頭の中で少し考えてから口を動かした。

「マザーレイク…。そう、恵ちゃん、マザーレイクって呼び方最近流行っているやんか。琵琶湖は、その大きな懐に何でも受け入れて、癒やし、救ってくれるのと違うかなあ。人の生き死に関わる疑問は、俺たちには分からんけれど、生まれて死んで行く意味は、それぞれ自分が見つけて行くものやと思う。それは多分、これや、と他人に説明出来るものじゃなく、本人でさえ理屈で分かるものじゃない。死ぬ瞬間に初めて命で感じる気がする。淳ちゃんは、きっと、自分の人生に対して、後悔よりも満足の方が大きかったと思う」

言葉の足りなさにもどかしさを憶えつつ、拓斗は、沈んだ恵の横顔を見つめた。

「でも、死んでしまったら、何もかも終わりよ。死ぬときに、人生の謎が解けたって、意味ないじゃ無い。生きてる内に、幸せを掴まなくっちゃ。それに何より、淳ちゃんのガキンチョが、可哀想過ぎる。葬式に行ったとき、淳ちゃんの子供達、泣いていなかった。まだ小学生の上のお兄ちゃんが、大人の補佐を受けながらも、ちゃんと喪主を務めていた姿に、こっちの方が泣けてきたわ。もし、泣きたいのをじっと堪えている、そんないじらしい子供の姿を淳ちゃんが見てたら、絶対自分を責めていたと思う」

「恵ちゃん、お線香あげに行っておあげたんやね」

「うん。そのとき、別れた奥さんを初めて見たわ。葬儀中、ずっと無表情だったけど、最後のお別れの時になって急に、花に埋もれた淳ちゃんの亡骸にしがみついて泣き崩れていた。それを見てたら、夫婦って、一緒に居るときに、どうしてわかり合えないんだろうって思った。男と女だから？でも、死んだときに、どれだけ憎み合っていたとしても、大概の人は、後悔と悲しみに打ちひしがれる。あたしも元檀那といたとき、寂しさで一杯だった。顔を合わせても、絶対目と目を合わせなかった。家族の一員ではなく、ただの同居人だった」

昔、何度も聞いた話だった。あの時は、その都度、二人の間に乾いた風が流れた。それは、遠く離れた異郷の砂漠の上を吹く砂塵のように、よりくもった景色しか映し出さなかった。しかし、拓斗も家庭を持ち、元々他人同士の共同生活が、いかに些細な原因で崩壊するものであるかを、身をもって知っていた。独身時分、家庭がオアシスになることを、夢見なかった訳では無いが、母親が、借金と浮気が原因で蒸発した父親と離婚していたので、結婚生活に対して何処か冷めたイメージを持っていた。真子と一緒に七年間、幾つものもめ事や喧嘩もあり、舞い上がった砂塵が収まって見つめたオアシスに、水が干上がってしまっているのに気づきもしていた。

恵の育った家庭も、母親が離婚を繰り返し、その度に父親が何度も変わった。昨日まで知りもしなかった大人の男を、すぐにお父さんと呼べるはずも無かったし、ようやく喋れる様になったときには、すでに違う父親に変わっていた。やがて親戚中を盪回しにされて、忌避される環境の中、幼い心の中に必死になって自己防衛のための壁を作った。閉ざされた敵意の中で、恵は夢を見るしか無かった。それは、将来自分が作る家庭であった。優しい檀那さんに愛され、可愛い子供達に囲まれて、何処よりも暖かい家庭を築く夢だけが、子供の頃の恵を支え、励ました。

そして、二十二歳の時、弁当屋の配達の仕事をしていたときに、得意先の会社の若手社員だった村上に見初められてプロポーズされた。真面目で、好男子の村上に好印象を持ってはいたが、自分から返事をするには出来なかった。村上は、思い倦ねていた恵を積極果敢に押し切って、承諾を勝ち得た。それから、三ヶ月も経ない内に結婚へとたどり着き、恵の夢が大きく膨らんだ。テレビのコマーシャルみたいに、年老いても、手を繋ぎ合って歩ける夫婦になろうと、約束し合った。二人の子供も授かり、恵は幸福の絶頂であった。

ところが、当時、夫の仕事の都合で大阪の狭いアパートに住んでいたが、子供も大きくなって来たので、通勤に便利で、土地も安かった滋賀県にマイホームを建てて、住み始めてから全てが変わった。始めの内は良かった。朝、夫が出勤する際に必ず恵は、玄関の外に出て、近くの駅に向かうのを、角を曲がって姿が見えなくなるまで手を振って見送った。夜八時頃、帰宅の夫がチャイムを五回鳴らすのが合図で、恵が鍵を開け、満面の笑顔で迎えた。夫が靴を脱ぐのに上がり口に腰掛けると、奥から幼かった聡史と恵美が、歓声を挙げながら掛けてきて、競うようにその膝頭の上を取り合った。ようやく落ち着いて、二人が満足そうに並んで座った上に、最後に恵が

腰掛けると、幸福の蕾が崩れ、笑いの日溜まりに花開いた。

それから三人は、一緒に入浴し、恵は、風呂場に木魂する籠もったはしゃぎ声を背中で聞きながら、夕方から途中まで仕込んでおいた夕食の仕上げをした。そんなひとときが、たまらなく愛おしく、昂揚感に溢れ、幸福に満たされるのを噛み締めさせてくれた。自然に上がった口角の端から、歓喜の歌がこぼれ落ちた。このささやかで偉大な日々が、いつまでも続く様に思い、祈っていた。

あれは村上と恵の結婚十年目の夜のことだった。

その日の朝、いつものようにリビングダイニングキッチンに広いテーブルに、夫を中心に、左側に聡史、恵の立つキッチン側の右に恵美が座り、朝食を摂っていた。バルコニー側の大きな窓からは、小鳥の囀りと、明るい春の日差しが、食卓を包んでいた。

恵が、煎れ立ての珈琲を夫の前に差し出しながら言った。

「パパ、今夜は会社、遅くなりそう？」

夫は、新聞を広げながら怪訝そうに恵を見上げた。

「いや、今日は定時に上げられるはずや」

恵は微笑みながら頷くと、新聞に目を落とす夫の横顔をまじまじと見つめた。そして小さく溜息を漏らすと、空いた皿を下げ、シンクで洗い始めながら思った。毎年のことながら、結婚十周年の記念日すら憶えていない夫の無神経さに、呆れた。血液型による性格判断を鵜呑みにする訳では無かったが、O型の人間の無頓着さを、B型には理解し難かった。それでも、期待を棄て難い恵は、少し考えてから、もう一度夫に振り向き、さり気なく話し掛けた。

「あっ、そうそう、お隣の佐原さんのお嬢さん、この秋に結婚が決まったそうよ」

「ああ、時々出入りしているのを見掛ける、あのヤンキーの兄ちゃんとか」

今年で三十路を迎える隣家の長女の絵里子には、確かに今付き合っているパンチパーマの、一見チンピラ風の男がいて、家をしょっちゅう出入りしていたが、結婚話は、恵の嘘であった。

「人を外見で決めつけてはいかんが、佐原さんのご夫婦、よく賛成されたな。恵美があんなのと一緒にとなると言い出したら、僕はきっと、卒倒するで」

卓上で新聞の一面を大きく捲り、三面記事を開いた。その風が、恵美の顔を舐めた。

その夜、十時を回っても、夫は帰って来なかった。恵は、いつも夫の座るダイニングテーブルの椅子に腰掛け、頬杖をついて、正面のベージュの壁の掛け時計の秒針の動きを見つめていた。聡史と恵美は、父親を待ちきれずに、とっくに食事を済ませ、二階の子供部屋で眠っていた。テーブルの上には、ワインとグラス、取り皿が並んで置かれ、恵の前には、子供達二人が共同で書いた手紙があった。テレビには、恵が毎週楽しみにしているドラマの『金妻』が映っていた。主題曲の『恋に落ちて』が流れ、恵は画面から眼を逸らし、瞳を閉じた。

ここ最近、夫は連絡もせずに遅くなるが増えていた。理由を聞くと、残業だの接待だのと言っていたが、何故か金曜日が多かった。二週間程前に、夫の同僚で、懇意にしている藪坂の妻に連絡を取り、それとなく会社や仕事の状況を聞き出そうとしたが、話し好きの藪坂の妻の世間話や愚痴に終始し、思うようにはいかなかった。夫のことを信じたかったが、専業主婦をしていて、近所付き合いも苦手な恵は、不安な心を沈める術も無かった。

恵は、テーブルに飾っておいた白い薔薇を花瓶から抜き取ると、深紅色の絨毯の上にばらまいた。

その頃、夫の村上は、ホテルのバーに居た。広い店内は、ほの暗く、薔薇色の絨毯が敷き詰め

られていて、黒服が落ち着いた動きで、黒い革張りのソファの間を歩き来していた。クリスタルの照明に、漆黒のピアノの生演奏が、緩やかな時の流れを演出していた。老舗らしく、時の重みを感じさせる重厚な楕円形のカウンターの中央に村上は、深刻な面持ちで、柔らかな丸みを帯びた大きめのブランデーグラスを手で温めながら、先から右隣の席で、談笑している黒色のジャケットに赤いシャツ、ジーンズにスニーカーといったラフな出で立ちだが、話の内容から青年実業家らしき男と、その両脇で微笑む美女達の話に苛立っていた。目の前に、ボトルをずらりと並べ、カウンターの右隅でいかにもご満悦といった感じに、鼻持ちならぬ嫌悪感を憶えていた。高笑いをして、酔ってきた男が、村上の横に座っていた女の肩を軽く叩いた。女は思わず、持っていたカクテルグラスをカウンターに落とした。その赤みがかかった半透明の液体は、村上の方へ流れ、グラスが下に転がり落ち、氷と赤い薔薇の花弁がカウンターを伝い、縁から絨毯の上に零れた。

女が、おしぼりで自分の赤いスーツの袖を叩きながら村上に詫びた。村上は、自分の膝も濡れているのに気づいて、チャコールグレーの背広の内ポケットからハンカチを取り出そうとした。すると、それを見ていた顔馴染みの黒服がすばやく二人におしぼりを差し出し、カウンターのグラスを片づけた。黒服は、村上の方を向き、同情めいたアイコンタクトを送った。村上が膝を拭いていると、男が背後に近づいてきて、軽く頭を下げた。

「すみませんね」

男は、ジーンズのお尻から分厚い二つ折りの財布を出して、中からピン札を二枚抜くと、村上に渡そうとした。これ見よがしに開いた財布の中身は、万札がはち切れんばかりで、村上は、男の嫌らしさに思わず目を逸らした。村上は、おしぼりをカウンターに置くと、再び男を見て言った。

「いえ、結構です」

男は、なお二回、押しつけようとしたが、頑なに拒む村上に気落ちして、席に戻った。

村上は、気を取り直して、バーテンダーに二杯目のお代わりを頼んだ。しばらくすると、録画のコマーシャルを逆スキップしたみたいに、先程と同じシーンが再生されていた。

「そう遠くない将来、マスメディアを使ってのパブリシティも考え無いといけない時代が来る。その時、テレビコマーシャルは、今のような効果は期待できないだろう。これから、日本の経済は益々発展し、人材不足になると、マイホームでゆっくりとテレビを見る人の絶対数が不足してくる。そうすると、どうなるか。視聴者は、ビデオ録画をして、余暇にまとめて見るようになるが、時間が無い。すると、邪魔なコマーシャルは、飛ばすようになるし、きっとその頃には、テレビに内蔵された録画機が、自動でスキップしてしまうだろう」

男は、延々と、未来予想の自説を女達に述べ始めた。丁度、バブルが始まる時期で、男の目には、楽観的ビジョンしか、思い付かなかったのだろう。現代から見ると、半分当たっていて、半分はずれている。

「テレビ局も、クライアントの獲得には必死だから、視聴率以外のこうした問題では、頭を悩ますのに決まっている。死活問題だから。それを食い止めるのには、そんなテレビを作らせないことだが、一度憶えた便利さを、視聴者が簡単に手放す筈が無い。そこで、クライアントが取る行

動は、三つに絞られる。一つ目は、新聞やラジオなどの他のメディアへの移行。次に、テレビ番組内で、宣伝して貰うこと。最後は、自らが番組を買い取るか、作ることになるだろうな。でも、それは一部の大手会社にしか不可能だし、中小企業は、コストを掛けずに、いかにメディアを利用するかが、重要なファクターとなる。でも、無理だろうな。資本主義の世の中じゃ、富を持った者が、富を持たない者の人権を奪い、それによってどんどん、貧富の格差が広がる様になっている。所詮、金を持った方が勝ちってことだよ」

男の話に美女達は、甘美な催眠術を掛けられたかのように大人しく、ただ微笑みながら頷くばかりだった。男の経営する会社の社員で、彼に心酔しているのが見て取れた。

「今度の大阪放送の我が社のコマーシャルは、凄いぞ。番組とタイアップして、二時間ドラマの中に、会社のメッセージが含まれていて、見終わった後に、我が社の製品に興味を持つ様に仕組まれている」

男は、両脇の美女を交互に流し目に見ると、目の前にあった煙草の箱を、片手で上下に忙しなく振り、出てきた一本を口に咥えた。それを見ていた左隣の、先ほどグラスを落とした美女が、すかさずライターを横から取って、その煙草に火を点けた。男が深く吸いこんだ煙は、自身の肺の深底部まで届き、悲鳴に似た風音を響かせて口腔内に戻り、唾液と混じり合ったあと、白色から紫色の煙粒子と変わり、周りに漂った。

村上は、腕時計に目をやると、デジタル数字の味気なさに苛立った。気を静めるようにブランデーグラスを口に近づけたとき、背後に気配を感じて振り向いた。

「ごめんなさい。会議が長引いちゃって」

そこに立っていたのは、村岡の会社の取引先、八代物産の事務員である近藤逸子だった。百七十センチはあるかと思われる長身で、長い髪を肩下まで伸ばし、ボリュームを抑えるように分け目を付けた頭頂から、真っ直ぐに眉毛まで伸びた前髪は、少し重く感じられたが、逆にそれが、个性的に見え、全体的に古風で清楚なイメージを醸し出していた。紺色のスーツ姿が、より彼女の生真面目さを引き立てていた。村岡の左側の椅子に腰掛けた逸子は、いつもより疲れた顔の村岡の横顔を、前髪の奥の潤沢な黒い瞳で確かめた。

「疲れているの？」

村岡は無言で、首を横に振った。まだ酔いが浅いらしく、まるで自分を取り戻すかのようにグラスに口を付けた。しかし、その飲み方は、味を楽しんでいるのではなく、何かを吐き出すために悪酔いするような、籠もった感じだった。

逸子は、シェーカーを八の字に振っている中年のバーテンダーの吉井を見た。吉井はそれに気づくと、濃いひげの下に白い歯を見せて微笑みながら微かに頷いた。暫く待つと、逸子の前に吉井がやって来た。

「いらっしゃいませ。いつものカクテルでよろしいでしょうか」

「はい、お願いします」

「かしこまりました」

吉井が下がると、二人の間に、重たい時間が流れ出した。それは、いつもと変わらぬ落ち着いた表情の逸子の方からではなく、苦渋を舐めるようにブランデーグラスを傾ける、村岡の方から

溢れていた。いつ破れてもおかしくなかった沈黙の薄膜に、爪を引っ搔けるように、村岡が言った。

「来月、私もとうとう四十歳になる。最近、朝起きても、前の日の酒や疲れが取れずに残っていることが多くなってね。二十代の君には、分からないだろうが、身体が衰えると、気力も萎えてくるものなんだ。それに、心の何処かにすきま風が吹くように、やたらと若かった頃を感じたり、考えていたことが思い出されて、なんだか、このまま生暖かい場所で、のんびりと生きていることが嫌になってね」

少しはアルコールが回ってきたのか、酔ったときのいつもの語り口調になっていたが、不穏な空気が言葉じりに表れていた。再び置かれた間に、逸子は言い知れぬ緊張感に襲われた。

「このまま歳を重ねていくだけで、自分は後悔しないのか、すごく不安なんだ」

言いながら村岡は、自分のことしか頭にないことにはっと気づいて、一瞬、無垢な少年のように恥じらいの色を見せ、逸子の表情を盗み見た。しかし、その通りで、今日まで好き勝手に生きてきたし、それが理想の人生のように思ってきた。人一倍働いて、家族さえ養っていれば、後は自由に毎日を面白可笑しく送っても、構わないと思ってきた。

「すまない！」

突然、村岡が頭を垂れた。

中年に差し掛かった大の男が、まだ二十代の小娘に深々と頭を下げるのを、逸子は自分とは関係の無い出来事のように、暗い天井の上から観た。その居心地の悪さから外した視線の向こうに、顎を引き、背筋をぴしりと伸ばしてはいるが、何処にも無駄な力が入っていない姿勢で、腕を開閉させながら、シェイカーを胸の上で、頂点を突くように円を描きつつ、リズムカルかつ豪快に振る吉井の姿があった。その迫力のある動きをいつもは見惚れていたが、今は現実感が無く、シナプスの途切れた視覚に機械的な映像として滞ったままだった。

吉井が、逸子の目の前で、グラスにジャック・ローズを注いだ。薔薇色の表面に、砕かれた氷の欠片が浮かんだ。その周りを微かな気泡が支えている。逸子は、震える手でそれを、ローズ系の、いつもより濃い色のルージュを引いた唇に運んだ。

「謝らないでください。謝られたら、今までのすべてが嘘になるわ」

逸子は、そう言って、村岡の全身から滲み出るくたびれた雰囲気、胸に吸いこむように、深呼吸をした。思えば、仕事の関係で知り合って、村岡と不倫の関係になってから、四年の月日が過ぎ去っていた。当時、バリバリのエネルギーな営業マンだった姿は、今の村上からは想像も出来ない。中堅の役職になって、後輩の育成や、成果をまとめる事務的な仕事が増えたとはいえ、身体全体から発するパワーや、若々しさを失ってしまった。ここ一年の間に、傍に居た逸子から見ても、随分老けたと思う。それでも、強引に口説かれ、執拗に求められた日々は、逸子の全身に刻印され、褪せることがなかった。それを愛だと信じていた。妻子がいても、その影に隠れて、見つめることをしなくて済んだ。村岡によって揺さぶられた快い揺り籠の中で、甘い夢を見ていた。女の悦びを知ったのも、初めての男だった村上によってであった。その彼が、今、別れを切り出そうとしている。自分を棄てようとしている。

「いつかは、こんな日が来ることを、少しずつ予感をしていたけれど、私、自分でそれを決めな

ければならないって、ずっと思っていたの。きっと、あなたからは言い出せないだろうと思っていたから。だから、私、正直に言って、今からあなたが言おうとしていること、最後まで聞く勇気がない。ごめんなさい」

逸子は、下を向いたまま、声を震わせた。そして、席を立ち、身体を村上の反対方向に向けた途端、強い力で引き戻された。

「もう少し、話を聞いてくれないか」

懇願と強制の入り交じった顔付きで、村岡が逸子を捕らえた。出会った頃と同じ眼差しに、逸子は妖術を掛けられたかのように、自分の意思が溶けていくのを感じ、腰が折れた。飼い慣らされた犬が、主人に嗜まれる感覚のようでもあった。突然涙が止まった。

「君には、本当にすまないことをしたと思っている。私なんかと付き合ったばかりに……。君なら、その気になれば、私何かよりも、もっと若くて、独身で、金のある奴なんかといくらでも付き合うことが出来たはずだ。家を出て、アパート暮らしをする必要もなく、毎日温かな家庭に帰ることも出来ていたはずだ。それをみんな奪ってしまった。ずっと、早くけりを付けなければと、分かってはいたが、君を失うことが、怖くて、どうしても出来なかった。でも、そんな自分を許せなかったのも事実だ。そのくせに、あと一年だけ、半年だけ、一ヶ月、一週間、今夜だけ……。そう自分に言い聞かせながらもずるずると今日まで来てしまった」

一回り違う年齢差によるものか、口説き上手な口のせい、逸子はいつも村上の巧妙な言葉に屈してきた。だが、今夜は、いつもと何処か異なる自分を感じていた。ずるずると彼の世界に引き込まれそうになるのを、頭上にもうひとりの自分が居て、所帯じみた中年の男と、恋に盲目になった女を見下ろしていた。口優しく、もっともなことを言っている男のずるい嘘が垣間見えた。都合が良いときだけ呼び出され、都合が悪いと、仕事や用事を理由に逃げていただけの村上の実像が、急に浮かび上がってきた。それは、いきなり別れを切り出そうとしている、村上への憎しみがそうさせるのだろうか。いや、ちがう。少し前から、彼に抱かれた時に、これまでと微妙に変化した愛撫の仕方で、不安を抱いていた筈だ。それならば、自分の心にたった今、劇的な様変わりが起こり、逆りそうだった熱情が何かに変わったのか。逸子は、急激なその落差に、その居場所から浮き立ち取り残された気がした。

——本当は、愛されていなかった……。そう思う自分も、本当に彼を愛していたと言えるのか……。別れを語る村上の言葉を遠くに聞きながら、逸子は自問自答した。

その時だった。さらに酔った先程の青年実業家が、村上達に弄るような視線を注ぎながら吐き捨てるように言った。

「おい、おっさん。好い年こいて恋愛ゲームなんかしてんじゃねえよ。金もねえ奴に、愛などを囁く資格が有るとでも思っているのか！」

その顔は、野望と金銭欲に塗れた人間特有の傲慢さに溢れて、落ち着いたバーの雰囲気は今にも占有しそうだった。両側の美女達が、憐れむような眼差しを村上達に向けていた。村上は、しばらく彼らを驚いた眼で睨み付けたが、視線を落とし、何かぶつぶつ言うと、逸子に眼を映して小声で言った。

「場所を変えようか」

席を立とうとする村上と逸子に無視されたと感じた青年は、二人の前に駆け寄り、広い肩を怒らせて立ちはだかった。

「なめんじゃねえよ。俺様が訊いてるのに、ちゃんと返事くらいしたらどうだ」

リーガルのスニーカーの障害物に眼を降ろしていた村上は、ゆっくりと視線を上げていき、たどり着いた陶酔しきった青年の顔をまじまじと見つめた。

「先の俺の好意も無駄にしゃがったし、お前には礼儀作法ってものが分からないみたいだな。どうせどっかの安サラリーマンの分際で見栄張りやがって。こちとら、この大阪で身体張って商売やってんだよ。まさか敬愛商事の名前を聞いたことが無いとは言わせないぜ」

村上は社名を聞いて、東京に本社があり、二年前に大阪に進出して来てから急成長している商事会社を思い出した。しかし裏では、高利貸しを兼業しており、借金に苦しむ人々を更に追い詰めて、何もかもむしり取る血も涙も無いやり方をする会社だという噂を耳にしたことがあった。

村上は、酔っ払って息巻く青年を恐れることは無かった。寧ろ自分を見失って過信し、いずれ行き詰まるか、社会から制裁を受けて失墜するであろう青年の運命に、同情と憐れみさえ覚えていた。それはこれまで一直線に会社のためにひた走ってきた自分の人生経験の結果が、そう感じさせたのだ。だが、目の前の青年はまだ過酷なサバイバルレースを走り始めたばかりで、ゴールの先に何が待ち受けているのかを見ようともしていなかったし、行く手を遮るハードルを飛び越えるか、蹴り飛ばすことでしか前に進めなかったと言ってよい。村岡という小さなハードルとも言えない障害物は、とっとと路傍に蹴散らしたかった。

自分の経営する会社名を出しても眉一つ動かさず、細目で穏やかな表情の村岡に、青年は更に苛ついた。いつも対人認知における相手の微笑みは、自分に対して畏怖か嘲りかのいずれかだった。この時は後者だった。野望に塗り固められた脳内のドーパミンが煮えたぎり始めていた。

ベージュのカーテンの隙間から漏れる青白い月光が、テーブルに俯せて眠っている恵の頬と、それを伝う地上の星を照らしていた。明かりが消えた部屋には、閉め忘れた水道の蛇口から、間隔を開けては溜まりなく落ちる水滴と、恵の寝息の音だけが静かに響いていた。

午前三時過ぎまで村上の帰りを待っていたが、諦めて一度は二階の寝室のベッドに入った。だが、寂しさと虚しさと、意識の外に追いつくとする悔しさに眼が冴えて眠れずに、再び階下へ降りると、ほんのりと明るく、優しい月光に満たされた部屋の美しさに、思わず立ち尽くしてしまった。明かりを付けることが出来ないまま、夕べから準備しておいたワインを開け、一人でボトルをほとんど飲み尽くして、いつの間にか眠ってしまった。月光の照り返しに溶け、存在感の薄まってしまった青黒い受話器をぼんやりと見つめながら朝を待ったが、普段飲み慣れないワインの魔力が、恵の胎内に生まれようとしていた幻妖を打ち負かせた。

恵は、久々に夢を見ていた。子供の頃、親戚の家に預けられ、大人達が恵に聞こえないように内緒話をしているのを、暗い心の耳で聴いていた日々が、口元を歪めた。下校して居間の隅で、畳に教科書とノートを広げて宿題をしていると、叔父の妻が、眼にせせら笑いを浮かべながら言った。

「なにしてんの。もうじき、みんな帰って来るやろ。さっさと片付けな」

自分の娘達には、勉強部屋をあてがっていたが、居候の身には、その家に落ち着ける場所さえ無かった。おやつでさえ、娘達にはふんだんに与えられていたが、恵は一緒に遊んでいた庭に、いつも置いてきぼりを食うだけだった。

数え上げれば切りが無いほど、あからさまな差別を受けてきた。その度に、心の中の母親に、早く迎えに来てと、無言の叫び声を上げていた。今も夢の中で、恵は声の限りに助けを呼んでいた。それが母親であるかどうかは分からなかった。夢の場面は次々に変わり、苗の植え付け前の田圃の水鏡が、月光を深く透明に映していた。恵は、その畦道をとぼとぼと泣きながら歩いていた。歩いても歩いても、母の待つ家路にたどり着けず、心細さから段々怖くなって、ついにはしゃがみ込んで両手で顔を隠して泣きじゃくってしまう。無数の蛙の鳴き声が急に大きくなり、恵を責めるように鳴り響く。すると周囲の田圃の泥から黒い人影の群れが湧き上がり、罵声を浴びせながら覆い被さってきた。

2-1 道楽

カフェバーにもう、居られなくなった恵は、仕事を探していた。かといって、何処かの会社に入って、朝から晩まで働こうとは思わなかった。元々、高校を卒業してから結婚するまで、会社勤めをしたことが無かったし、時間から時間に縛られて、同僚や上司に気を遣いながら働くことなど、性格的に無理だと思っていた。だから、同級生とたまに会って、お茶を飲みながら、彼や彼女達が会社の愚痴を溢したり、時には憧れている上司や、意中の異性のことを楽しそうに話すのが、自分とはかけ離れた遠い世界のことだと思えた。

就職して二、三年もすると、仕事にも大分慣れ、中には新商品開発のプロジェクトなど、比較的大きな仕事を任されて、その責任感の重さを自慢気に語る友人の横顔を見ながら、哀れみをかけることはあっても、羨望することは一切無かった。

誰かに何かをして貰うこと、愛するより愛されることを、幼い頃から思い続けて来た彼女の心には、そうした自分で自分を充実させようとする生き方とは、ほとんど無縁だった。恵は夢を見なかった。目標を掲げ、それに向けて努力し、実現したときの喜びを味わいたいという願望の意味が、全く分からなかった。そんなことよりも、拓斗と一緒に居て、ドライブをして海を見に行ったり、おいしいものを食べに連れて行って貰ったり、たまに服やアクセサリーを買って貰っている方が、よっぽど幸せな気分になれた。

しかし、今はお金が欲しかった。いつか離婚するときのために、まとまった蓄えがどうしても必要だった。それを、いくら何でも拓斗に求めるわけにはいかない。ましてやまだ、夫と別れて拓斗と暮らすことなんて、不安というよりも考えられなかった。

だから、拓斗が持ち出したアルバイトの話にぶち切れたのである。

2-2 延命公園

延命公園内の野外ステージの周囲は、満開の桜が咲き誇っていた。時折吹くそよ風が、花園を舞う蝶のように花びらを飛ばした。拓斗は車を桜の木の下に止め、花びらが地面に落ちるのを、一枚一枚、最後の着地先まで見ていた。

ステージに目をやると、五、六歳の男の子と、三歳位の女の子が、落ちた花びらをあっちこっちから拾い集めては、何かごねごねやっている。傍らのベンチに腰かけて、仲の良さそうな夫婦がそれを見つめている。父親が時折、子供たちに近づいて愛らしい姿をカメラに収めている。少し離れた木陰に置いてある、花柄のスカーフに包まれているのは、朝早くから母親が頑張ったお弁当だろう。

こんな陽気の良い日に、その光景は、すっかり溶け込んでいた。

-----俺にも、家族とこうして過ごせる幸せな日が来るのだろうか。

とってもそんな風には思えなかった。それどころか、俺はそんな家庭を壊そうとしているのではないかと拓斗はため息をついた。そんな資格はなく、自分の子供を持つことなんて、考えるだけで怖かった。

恵はやっぱり来た。いつもより一時間過ぎていたが、拓斗の横に車を停めた。でも中々降りて来ない。拓斗は車を降り、助手席側から中を覗いたが、黒のフィルムでよく見えない。フロントガラスに回ればいいのだが、何となく目を合わすのが気まずかった。ドアレバーに手をやると、容易く開いた。

拓斗が買ってやったレーバンのサングラス越しに、恵はこっちを見ていた。唇の両端は、固く締まっていて、昨夜別れた時のままだ。

ステージのある広場を離れ、百段程の石段を登り切った山の中腹も、踊り場のような狭めの広場になっていた。ここでも、花見客がそれぞれに、桜の下やベンチに座って、弁当を開け、缶ビールやお茶を飲んでいて、どの顔も、生き生きと輝いて、束の間の季節を満喫していた。こんな風に、幸せそうに寛いでいる人たちを見るのは、久しぶりのことのように、拓斗は懐かしい気分になった。小高い山の一千本のソメイヨシノの優雅さは、人々を憩わせるのに充分だった。

広場を横切った所に、頂上に続く階段があった。登りはじめの石段より少し急で、拓斗は恵に合わせてゆっくりと歩いた。額に汗がにじみ、右手のシャツの袖で拭いた。恵を振り向くと、涼しい顔をして唇の両端だけで微笑んだ。恵は滅多に汗を搔かない。いつものようにひんやりとした右手を、拓斗は左手で握り、軽く引っ張った。所々欠損した石段を飛ばし、その度に後ろに続く恵の手を肩の高さに持ち上げてリードした。恵の身体が、左右に小刻みに揺れた。

出会って間もない頃、知っている人の誰もいない須磨海岸の砂浜を二人で歩いたとき、始めて恵が拓斗の肩にもたれ、手を握った。

――拓斗の手.....温かい。でも、掌の温かい人は、昔から心が冷たいって言うんよ。

夕暮れの潮風が、恵の髪の香りを拡げた。

――でも、この手がもし冷たかったら、誰が恵の掌を温めてやれるんや。

気障な台詞を言っていると言わんばかりに、恵は悪戯っぽい目を、拓斗の肩越しに向けた。

延命山の頂上には、ホールの入り口のような貯水場が設置されていた。ここから、今見渡している市内に安全な水が供給されている。しかし、管理者が常時駐在しているわけではなく、代わりに警備のカメラが要所、要所に据え付けられていた。そんなカメラにさえ、意識を向けてしまうことに、拓斗は言い知れぬ憤りを憶えるのだった。

昔はこのあたりに十メートル位の高さの展望台があったが、この設備のために取り壊されたのだろうか。拓斗がまだ小学生の時、よく遊んだ場所だ。

展望台の上から、草むらに座っていちゃついているカップルを見つけては、からかったり、やんやと囃し立てたりして、近所の悪ガキ仲間とはしゃいでいた。時たま、本気になって怒り出すカップルもいて、そんな時は、必死の思いで幅の狭くて急な鉄の階段を駆け下りて、石段を数段飛ばしで走り下り、猿の檻の裏まで逃げ込んだものだ。まるで自分たちの方が、檻から脱走して追われている猿みたいだった。

貯水場の前は、生まれ育った街を見渡せた。山裾に平行して近江鉄道の線路が引かれ、たった二両の電車が、ガタン、ゴトンと、山の上まで長閑な音を響かせていた。耳を澄ませば、木々の間から、『けっけ、けっこー』と、まだ練習中の時鳥の鳴き声が聞こえる。彼方の鈴鹿山系まで続く景色は、横に緩やかな曲線を描き、薄く半透明な白っぽいベールに包まれていた。

拓斗は、子供時分はこのちっぽけな山で、こんな風に風や、色や音を感じたことは無かった気がした。昔から、ほとんど変わっていない筈なのに、初めて訪れた場所のように周りを見つめた。その視界の角に、小さな小屋の屋根のような形をした畳三畳程の岩の上に飛び乗った恵の姿があった。目を細めて遠くを見つめている。

拓斗は静かに恵に寄り添った。

「この山、小っちゃい頃の遊び場やったんや。」

「いいところね。何か落ち着くわ。実はあたしの奈良の実家も、すぐ裏が山やったよ」

「――若草山？」

「そう。桜が咲き始める頃もきれいだけれど、散った後はもっと美しい。芝生が段々青々してきて、目に眩しいくらいになるの。鹿だってそうよ、山と一緒に生まれ変わる。冬毛からきれいな茶色の夏毛に生え変わるのだけど、その違いに気づくのは、地元の人くらい。毎日見ると分かるわ」

拓斗の脳裏に、小学校の旅行の時に見た若草山の情景が、途切れ途切れに浮かんできた。陽に照らされて輝く鹿の茶色と、芝生の緑。鹿せんべいを食う友達の笑い声。先生の怒声と少し疲れた顔。時間の経過によっても、留まっているものがある。

「頂上へ登った？」

拓斗は首を横に振りながら、恵を見つめた。

「夜景が素敵。この山と同じ低い山だけれど、全然違う。夕暮れから夜に変わるとき、平城京の昔に一瞬で変化しちゃう。もちろん、当時の家並みとはすっかり様変わりしてるけれど、基盤だけはそのまま残っていて、それに沿って、明かりが灯ると、ああ、ここに都が在ったんだって、想像出来る」

平安京という言葉に、拓斗は遠い記憶が蘇った。学生時分に歴史の勉強で憶えたことがある。『ナクヨウぐいす平安京』と、桓武天皇が長岡京から遷都した年号七百九十四年を、まだ暗記していたことに驚いた。確か、鴨川と桂川の中の京都盆地に、碁盤の目のように区画した町並みを作り、栄えた都と記憶する。あの『～条通り上がる』などの呼称は、そんな形態ならはだろう。以後、千八百六十九年の東京奠都まで都として機能した。その名残が、若草山から一望出来るのか、と拓斗は見てみたい気がした。当時の人々の暮らしが、花見をしている人たちのように、幸せだったのでは無いかと、想いを巡らせた。

そんな瞑想の世界に入っているのを、恵の冷たい手が現実呼び戻した。恵が突然、拓斗の左手を右手で握り、肩の高さまで横に持ち上げた。そして左手を拓斗の肩胛骨に廻し、両足を交互に滑らせながら足でリズムを刻み始めた。

「一、二、三、一、二、三」

ステップを数える恵の膝下までのスカートの裾が、気忙しく揺動している。拓斗の身体が、ぎこちなく左右に揺すぶられた。宙ぶらりんになっていた拓斗の右手を自分の肩口に添え、恵は拓斗の目を真っ直ぐに見つめながら、透き通るような笑顔を見せた。

「子供の頃、お母さんに教えて貰ったの」

為す術も無い拓斗は、恵の動きに身体を任せていた。押されたり、引っ張られたり、振り回されたりと、その度に、転げそうになった。

「これがワルツ。初心者が一番最初に習う踊り方だけど、あたしが一番好き。」

恵は動きを止め、まごついている拓斗を見てにっこり笑った。

「お母さんが習いに行っていたダンス教室に、始めからよく付いて行ってたの。見てるだけでとても楽しかったわ。何ヶ月かして、ホールで発表会が在ってね。その時踊って見せてくれたのが、ワルツやったんよ」

恵の瞳が、段々輝き出してきた。

「真っ赤なドレスに身を包み、ステージライトを浴びたお母さんが、とても格好良かったなあ」

生々しかった目が、薄ぼやけた景色より、もっと遠くを見つめていた。まだ若かった母が、練習に出掛ける朝は、いつもより長い時間、鏡台に向かっていたことも、ダンス教室の四十歳前後の男性指導員と言葉を交わす際には、いつもより一オクターブ上がった声になるのも、あの頃は不思議に思っていたことが、今は不思議だった。

一息つくると、恵は再び拓斗の手を取り足を取り、ダンスのレッスンをした。右足を下げたときに体重移動をするのだ、リズムが大切だということや、フットワークのさばき方として、ヒールからトゥへの移行の仕方といった車の特殊な操作法みたいなことを、色々教えるのだが、不器用な拓斗にすぐに飲み込める筈も無かった。

そんな二人の姿を、貯水場のカメラにずっと監視されているように、拓斗には感じられた。街に伝わる配水管に狂ったリズムの足音と、汗ばんだ呼吸音が振動し、音波になって拡がって行く気がしてならなかった。

2-5 ライバルはいない

『ライバルはいない』

手紙とは言い難いノートの切れ端に、太くて強い筆圧の字で書かれてあった。

恵が無理やり書かせたものでないことは、几帳面な筆跡で分る。拓斗は、嬉しかったというより、これを書いている時の聡史の気持ちを思わずにいられなかった。自分の母親が見ず知らずの男と恋愛していて、家にもほとんど帰らず、帰っても父親の不在の時ばかりで、これではとっくに家庭崩壊してしまっていると言っているのに、その寂しさや悲しみは子供心にもないのだろうか。恵はいつか何気なく、聡史も、妹の恵美にも一度も反抗期がなかったと言っていた。それは良かったと言えるのか。

恵は言っていた。子供たちにはちゃんと説明して、パパとママが何故こうなったのか、だから顔を合わせたくないとか、ママは幸せになりたいし、好きな人がいることを教えてきたと。その本当の意味をまだ小学生の頭で、どこまで理解出来ているのだろうか。そしてママのしていることが、許されることなのか。また、許されるとは、いったい誰に許されることなのか。

拓斗は、もう一度紙片に目をやった。幼い字が今にも滲み出すように見えた。足元に流れ落ちて、体を這い上がり、頸のところで巻きついてくる感じがした。また、文字の裏から紙を破って、炎でも飛び出すのではないかと不安に駆られた。

いずれにせよ、じわじわ滾ったやかんの湯は、いつか必ず溢れ出す。でも今の聡史にとって世の中で一番好きなのは恵であった。一番傍にいつもいて欲しかったし、誰より自分を好きでいて欲しかった。何よりママの笑顔が見たかった。その気持ちがあるからこそ、逆に本音を言えなくて、拓斗に対して、小さな心の中の葛藤から精一杯出てきた言葉だったのだ。

----- 『ライバルはいない』

3-4 ディスカス

引き戸を開けた部屋の冷たさに、拓斗は息を飲んだ。慌ててエアコンのリモコンスイッチを入れ、温度設定を最大に切り替えた。机の椅子に座り、リクライニングを倒して、机上に闇雲に足を乗せると、今朝の飲みかけの珈琲が残っていたマグが、勢いよく落ちた。『ニヤー』とモモ太がビクツとして鳴き、椅子の脚に体を擦り寄せてきた。

静かな部屋に、熱帯魚の水槽のエアの音だけが響いている。拓斗はうつろな視線をそれに向けると、この間、恵と立ち寄ったペットショップで見つけたスノーホワイトディスカスのペアの内の雌が、水の中で引っぱり無しに雄を追い払っていた。そのストレスのせい、雄の元々美しく白い体表が、黒ずんでいた。

ショップで見かけるまで、拓斗はディスカスにこんな色をしたアルビノがいることを知らなかった。普通、この熱帯魚の王様と言えば、メタリックブルーか、オレンジっぽい色をした個体が多い。体に流れるようなラインやスポットの模様が入っていて、白目の部分は赤色というのが常識である。しかし、こいつは、尾ひれの先端だけ、ライトの光の加減で、時折微妙に淡いブルーの発色をするが、全体的には、白目を含めどこもかも、晴れた朝方までに積った雪が、急に溶け出したような透明感のある白さに輝いていた。だから、小学生の頃熱帯魚に嵌まっていた拓斗のところに火が付いた。

ショップの親父に言わせると、このペアは何度も繁殖に成功していて、子育ても上手く、まだまだ稚魚が穫れるらしい。でも、よく考えてみれば、そんなによく産んで育てるペアを、安易に売りに出すだろうか。何故、もっと産むだけ産ませて、乳を搾り取られる牛のように、最期まで金蔓にしようとししないのか。産む稚魚の数と、いくら親が育てると言っても、水道光熱費や餌代等の諸費用は要るだろうから、それらを差し引いて採算が取れるかどうかのぎりぎりのタイミングで、鴨が葱をしょって来たというべきか。

4-2 喧嘩

「本当に恵を愛してるんや。どうしてそれが分からんのや。こんなに大切に思ってるのに、何で伝わらんのや。これ以上どうにも言いようがあらへん」

人前で泣いたことのない拓斗の目から、思いもしなかった熱い涙が、突然込み上げてきた。自分の心からの思いを遮断されることを、これほどもどかしく、悲しいと思ったのは初めてだった。いや、そもそも、本当の想いを誰かに伝えようとしたことなど、今まで一度もなかったに違いない。

中学生の時、数学の女教師に、職員室で、

「この子、いつも平気で嘘をつくのよ」

と他の教師たちの前で言われたことが、何故か急に思い出された。でも、あの時には、涙など出なかった。言い返す気にもなれず、ただ傷つき、悔しい思いをしただけだった。でも、その痛みは、自然治癒する外傷のようでは無く、心の奥深く入り込み、じわじわと固まっていく塊だった。

高校生の頃は、好きだった女に振られて、夕焼けの湖を見つめて、ひとり泣いたことはあったが、誰かに見られた訳ではなかった。全身の力が抜けていく感覚は、いつか自然消滅していった。

だから、心の奥底から溢れ出すように流れる涙が、頬を伝わる感触に、拓斗は自分で驚いていた。そして、恵みを深く愛していたことに、あらためて気づいた。それは、同じ深さを持った哀しみの裏返しでもあった。自分でも計り知れない汲めども尽きない深遠な泉から、意思とは関係なく滲み出ているように思えた。

唇を噛み締めながら、恵は車窓の外に流れる車を見るときも無く見ていた。

「もう、帰ろ」

言ったのは、拓斗の方だった。

「……………」

返事をしそうにない恵の横顔を確かめると、拓斗は路肩から車を出した。

宙に浮いているような感覚で走行していると、いきなり恵は車のドアを開け放った。拓斗は慌てて急ブレーキを踏み、道の真ん中に止まった。思わずバックミラーを確かめると、幸い後続車は無かった。

「あんたは、まだまだ子供や。いつつでも、しゃあーない、しゃあーないって言って、ええ加減に誤魔化して、自分で責任もよう取らんと、逃げてばっかいる」

恵はそう言いながら、後部座席にあったバッグを乱暴に掴み取ると、滑るように車を降り、力いっぱいドアを閉めた。そして振り向きもせず、横の狭い路地に早足で去って行った。

拓斗はそれを見届けると、項垂れ、膝のあたりに目をやった。だが、今日は、この膝を使って、恵を追いかける余力は、もう残っていなかった。

――終わった、何もかも。気怠い脱力感が全身に広がっていった。

『パパーン』

後ろの車が鳴らすクラクションの音に我に返ると、バックミラーにヤンキー風の古い黒塗りのベンツに乗った若いカップルの姿があった。

拓斗は、体の芯が熱くなってくるのを感じた。

『パパーン、パパーン、パパーン』

苛立つように、続けざま打ち鳴らす威嚇に、拓斗は無性に反抗したくなって、今にも飛び出したい気持ちをじっと堪えていた。もう一度ミラーに目をやると、ベンツの後ろにも、ずらっと車が停滞していて、あっちこっちからクラクションが鳴り響いている。

まるで世界中の人間が自分を非難しているように拓斗は思った。それと同時に、胸の中のコップの水に表面張力によって浮いていた刃が、今にも抑制していた激昂の底に沈みかけるのを、体を強張らせ、必死に耐えていた。

「おい、お前、何いちびとんねん。邪魔や言うとるやろ」

ヤンキーの兄ちゃんが、拓斗の横の窓をどんと叩いていた。そして無理やりドアを開けた。

「降りんかい」

言うが早いか、拓斗は素早く車を降りると、立ちはだかる男の右頬を、力任せに思い切り拳で殴りつけた。一発で男は仰向けに倒れたが、拓斗はその上に馬乗りになり、さらに顔や腹を殴り続けた。

二十発以上は殴ったろうか。すでに男は戦意喪失していて、ぐったりしている。拓斗は胸中に冷たい水が流れるのを感じた。剥き出してしまった感情の表面を、冷静さを取り戻した分子が、再び緊張して小さく薄い膜を作ろうとしていた。だが、一度沈んだ刃は、二度と浮かびはしない。

ゆっくりと立ち上がって、周囲を見渡すと、後続車も、対向車も微かなエンジン音だけ響かせて静まり帰っていた。路の真ん中で立ちすくむ拓斗の姿と、腹這いになって胸落ち辺りを苦しげに押さえている男の喧嘩の成り行きを、映画のワンシーンを観るように、大人しく傍観している。

男の乗っていたベンツの助手席に目をやると、男の女にしては上品そうな娘が、心配そうに伏し目がちにこちらの様子を窺っている。

拓斗は、言いようのない感情に少し眩暈を感じたが、すぐに男の手を取り、路肩へ移動させようとした。と、その時、何処からかサイレンの音がして、遮断されていた対向車の反対側の道路の向こうから、パトカーが二台連なって走って来た

恵は自宅の裏の駐車場に車を停めた。

拓斗の車がすぐに追いつき、その後尾に付けた。少し離れたところに街頭がひとつ灯っているだけで、ほとんどの家の窓の明かりも消えていて、沈むように薄暗かった。時計はもう十二時を指していたが、それが目に浮かぶのは恵だけだった。静寂な住宅街に、拓斗の車のエンジン音だけが異質に響いていた。

拓斗は慌てて恵の車に駆け寄り、運転席側から窓を覗いた。

唇の両端をギュッと締め、前方を凝視する恵の横顔がそこにあった。人差し指と中指で窓を叩く。恵の体はマネキン人形のように動かない。拳を固く握りしめ、もう一度呼びかける。無言の強い抵抗が、拓斗の胸に押し寄せてきた。

しばらく間を開けてから、ドアレバーを引くが、内から鍵が下りている。今度は拳を広げて、掌で感情を押し込むように窓にぶつくと、恵は指先で窓を小指の長さほど開けた。

「いい加減にしてや。ここ何処や思ってんの……。とっとと帰って」

押し殺されてはいるが、情感の隠った声で恵が言った。拓斗は胸の感情がすうっと引いて行くのを感じて、車から半歩後ずさりした。そして恵の横顔を哀しく見つめ、ふたりを遮っている窓が再び閉められるのを、呆然と見た。

住宅街の細く複雑な、迷路のような生活道路を抜け、拓也は車のアクセルを踏み込んだ。何処に行く当てなどない。とにかく恵の住む町を離れ、恵の家族の暮らしの臭いのする所を離れ、そして、自分のすべてから逃れたかった。

やがて国道に出た。昼間と違って、走っているのは大型トラックばかりだ。前に行く鹿児島ナンバーの十トン車に釣られ、進路は北の方向に向かっていた。街灯が横に流れ、擦れ違うライトが拓斗の目を掠めて過ぎて行く。

恋は、人を盲目にする。が、同時に詩人にし、ふたりを主人公にして、映画のようにカメラを廻す。たとえ誰も振り向きもしない三流映画でも、当事者だけの世界の中で、撮影され、封切られ、観客数がたった二人でも上映される。時に永遠に。今はヒットしなくても、いつかリバイバル上映され、誰かの記憶の中へ忍び込もうとしているのかも知れない。

北へ向かっている車の中は、拓斗にとって映画館になっていた。たった一人の客。スクリーンは、こころの思い出の中。いつしか国道の家並みの灯りは途切れ、前を走っていたトラックの姿も消えていた。少し狭くなった国道の両側に、恐ろしく広い田園が息を潜めて朝を待っている。田畑の遙か向こうには、満点の星々に照らされて、湖北の山々が漆黒に浮かび上がっていた。

拓斗は、走馬燈のように駆け巡る記憶の数々に、抑えきれない衝動に突き動かされ始めていた。それは少しずつ体の中で膨らみ続け、今にも爆発しそうな勢いで理性を浸食していった。

やがて皸われ、中から煮えたぎったマグマが噴きこぼれた。

拓斗は、走り慣れた湖岸道路でハンドルを切りながら、違和感を覚えた。元々狭い道だが、いつもと違って、対向車とすれ違うたびに、より狭く感じる。喫茶『オマージュ』を通り過ぎて、急カーブが連続するようになると、普段なら見えない対向車を想定して、アウトインの絶妙なラインを取り、滑らかに曲がるのだが、今日はその読みが鈍い。前方から車が反対側にはみ出しながら暴走してくる気がして、ついスピードを緩てしまう。十代後半に、あっちこっちの峠道を攻めまくった拓斗のドライビング技術に対する自負心が、脆く崩れ去った。自分の手も足も、何か身体から離れているような感覚だった。そればかりか、フロントウィンドウ越しの道や景色、カーステレオから流れている音楽、ハンドルを握っている感触さえ、五感から遊離していた。まるで雲の上を走っているような気分だった。

恵を失ったことが、これほど大きな喪失感を伴うことを、時間の経過とともに思い知らされた。その悲しみは、日に日に、拓斗の心の底流に突き刺さり、もがけばもがくほど、さらに深く、一番痛いところを弄んだ。

――もう、限界や。

運転することにも疲れて、拓斗は、琵琶湖に面した道路脇の、丁度、車一台分空いているスペースに滑り込んだ。眼前に、薄曇りの空を映した湖面が広がっていた。エンジンを切ると、けたたましく鳴っていた音楽も消えた。窓を少し開けると、湖の波の音が聞こえてきた。それは、拓斗の悲しみに閉じこもった心の奥まで、いとも簡単にすんなりと染み入ってきた。

どこかから、網を仕掛けてきたのか、漁船のエンジン音がする。車の横の桜並木の向こうから、デッキで仁王立ちしている漁師を乗せた船が現れ、目の前を通り過ぎていった。拓斗は、ジーンズの前ポケットから、よれよれになった煙草の箱を取り出し、中から一本抜いたが、真ん中で折れていた。それをゴミ箱に捨て、新たに取り出すが、一〇本くらい残っていたもののほとんどが、きれいに折れていた。辛うじて無事だった煙草を、拓斗は大切に丁寧に指で挟んで、火を付けたら、胸の奥が少しだけ明るくなった気がした。

この湖を、どれくらい恵と眺めただろう。雨の日、風の日、嵐の日、荒れ狂った湖もやっぱり何処か優しさを秘めていたと思う。晴れた日、虹の架かった夕焼け空、比良山系に浮かんだ白い雲、そして何より美しい山の白雪よ、時が永遠なら、変わらぬものがあるはずやろ。変わるものは、変えなくてはならないものは、変わらぬもののために、きっとあるんやろ。

拓斗は、助手席に左手を伸ばした。いつもそこにあるものに掌を重ねた。互いの指元まで強く指を絡ませた。精一杯の愛情を被せた冷えた手は、次第に萎えていった。

拓斗は、静かに誰も居ない助手席を、いつまでもじっと見つめていた。

恵は思った。

拓斗とこうして一緒に歩くことが、自分の本当の夢だったということ。それにやっと気づいたことに、言い知れぬ喜びを覚えていた。もう二度と、この温もりを手放さないと心に誓いながら、ゆっくり、ゆっくりと積もり始めた雪を確かめるように踏みしめた。

冷たい風が、二人の顔を撫で、後ろへ通り過ぎた。恵みは首に巻いていたマフラーを緩め、伸ばした先を、拓斗の冷え切った首に回した。

夕方、拓斗が店の仕込みをしていると、電話が鳴った。その時、いつもなら妻の真子が電話に出るのだが、留守中で珍しく拓斗が電話機の子機を取った。

「わしや、わし」

受話器の向こうから、大声の妙に馴れ馴れしい、少し囁れた声が聞こえた。聞き覚えは無かったが、その後、拓ちゃんとニックネームで呼ばれたので、知り合いには違いなかった。

「今から、兼を連れて行くけど、かまへんか？」

兼……。電話の主が、兼の同級生の源太であることが、それで分かった。

拓斗は一瞬言葉に詰まり掛けた。兼とはかれこれ三年は会っていない。

兼と拓斗は同じ町内ではなかったが、自治会が一緒で、第一町内から第五町内まであり、兼が一町内、拓斗が二町内で、互いの家の窓から人影を確認出来るほどの近距離内に住んでいた。拓斗が、母親の店の手伝いを始めた二十一歳頃からの知り合いで、その時兼は、まだ中学を出たばかりで、悪ガキ仲間と暴走族を作って、総勢百人位のグループメンバーのナンバー2になって、粋がっていた。その頃、その辺でバイクを流した後か、何処かで遊んだ帰りなのか、仲間四、五人でちょくちょく拓斗の店に食べに来てくれた。ひとりひとは大人しく、挨拶も出来る普通の十代の青年だった。ましてや飲酒欲より食い気が旺盛で、腹一杯になると、さっさと解散していった。

兼が十八歳の頃、警察によって強制的に族を解散させられると、仕事もせずに暇を持て余せた故か、毎晩のように巷を飲み歩くようになった。拓斗が飲みに行くと、至る所で会ったり、彼の噂を聞くようになった。最初は、スナックなんかで飲んでいると、後からやって来た兼のことを、カウンターで拓斗の近くに座っていた二十歳過ぎ程の女性グループのひとりが指を指し、呟いた。

「ねえ、あの子よ、噂の。透き通るような肌をしていて、凄く綺麗……」

実際、兼はやんちゃだったが、青白い童顔で、貴公子然としていた。くっきりとした二重瞼に見つめられ、にっこりと微笑まれると、大概の女は心をときめかせた。その腕に墜ちた女の数、十本の指では数え切れなかったろう。その風采を生かせば、もっと遊んだり、紐を付けたり出来た筈だった。

兼が二十歳を少し過ぎた頃、心底惚れた女に出会った。まだ十七歳だった久美である。母親が一人で切り盛りする店で、手伝うようになった久美に一目惚れした。店の常連だった兼は、店に通い始めたときは、あどけない中学生だった久美が、ほんのわずかな間に余りにも美しく成長した姿に驚き、それは兼の中ですぐに恋慕に変わった。

それから毎夜、店に通い詰めた兼は、母親の了解を取って、久美をデートに誘った。今までがそうであったように、久美もすんなりと受け入れてくれた。

愛車の真っ赤な色のポルシェで、大阪ひらかたパークに行き、一日中遊んだ。平日だったせいもあり、来園客も少なく、乗り物には乗り放題、遊び放題だった。久美は、子供のようにしゃ

いだ。それに釣られて兼も久し振りに童心に帰り、ポップコーンを頬張ったり、ソフトクリームを舐めながら、久美への恋情をより深めるのだった。

瞬く間に夕方になり、これが最後と、二人は観覧車に乗った。都会なのか、田舎なのかよく分からない中途半端な大阪の町を見下ろしながら、やっと兼の口は静かになった。頂上にたどり着く直前に、久美と向かい合って座っていた兼は、彼女の横に移り、おもむろに両手を窓に付け、ゴンドラを揺らし始めた。きゃーっと言って驚いた久美は、兼の腕にしがみつき、胸に顔を埋めた。夕陽がゴンドラを赤く染めていた。ジェットコースターの甲高い叫び声だけが、空に届いていた。

兼の左手の細く長い人差し指と中指が、久美の滑らかな顎を捉え、ゆっくりと自分の方に向けた。久美の時間が止まり、叫び声が遠のき、視界が消えた。

その日から、兼は久美の母親の経営するスナックの二階に住み込んだ。父親が一人営む小さなプラスチック工場兼自宅にたまに戻ってきたが、必要な荷物を取りに帰るくらいで、元々気の向いたときにしか手伝っていなかった仕事だが、ほとんどしなくなってしまった。そればかりか、生活費だとか言って、父親に金を無心した。

父親の隆次は、バブルが弾けて家計が苦しくなった影響か、元来、憎しみさえ憶えていた気の合わぬ二十五年連れ添った妻の琴美と離縁したばかりで、自分の飲み代さえ貧窮してただけに、そんな放蕩息子に辟易していた。しかし、怒鳴りつけて説教をすると、いつも最後は取っ組み合いの喧嘩になるどころか、兼に酒でも入っているときは、兼が包丁を持ちだして刃傷沙汰にまで何度かなったこともあった。

だから、兼が、居間の座卓の上に無言で置いた空の財布に、数枚の紙幣を入れてやるのが、習慣になっていた。

父親の汗と涙と機械の油に塗れたお札を、兼は己の飲み代と遊び代に使い、残った少しばかりの金を久美の母親に渡した。店でも金を使ってくれていたのも、母親に取って良い収入源であり、久美との同棲にも反対はしなかった。

だが、そんな暮らしがいつまでも続く訳がなく、三ヶ月もすると、仕事もろくにせず、毎日パチンコか飲んでいられるばかりの兼に、女の久美の方から三行半を渡した。兼は慌てた。今までどんな女も、自分のものにしてきただけに、相手から別れを切り出されたことに戸惑った。幼少期から、欲しい玩具は何でも手に入れてきた兼は、こういうとき、与えてくれる誰かにごねる方法しか見つからなかった。

兼は、久美の母親の美加代が、裏で久美を操っていると思い込んだ。他に客の居ない店で、スーパーで買って来た付き出しの準備をしている美加代の背中に、カウンター席に座った兼が言った。

「ママ、久美に何か言ってへんか？」

まだ何も知らなかった美加代は、訝しむ目で兼を振り向いた。

「いらんこと言うたんとちゃうか」

何のことを言っているのかさっぱり見当の付かない美加代は、付き出しの鯉の酒盗を入れたタッパーをカウンター端の冷蔵庫に入れながら口を開いた。

「何かあったんか」

「久美がわしと別れたってぬかしやがる。わしが何か悪いことでもしたんか？気に入らぬことでも言うたというんか？毎晩ちゃんと帰ってきているし、金に困らせたことも無い筈や」

焼酎の濃いめの水割りをすでに三杯飲んでいた兼の目は、据わっていた。

「ママが何か言うたやろ。……先月の附けも、この前払ったところやで」

この男には、金のことしか頭に思い浮かばないようだった。良いことも悪いことも、まず金で推し量った。自分の取る行動も、得か、損かが一番重要な判断材料だった。何か問題が起こると、必ず金が絡んでいると信じ、世の中全て金で解決出来ると固く信じていた。

「兼、ウチは何も知らんで。久美からも何も聞いてへん。それ、いつのこと？」

「タベや。タベあいつが言いよった。もう、この部屋出て行ってと。わしが買ってやったテレビやステレオ、カーテン、カーペット、それだけやない。歯ブラシから、コップまで、みんなわしが買ったもんや。それをどないすんねんって言ったら、何て言いよったかわかるか？」

兼が段々興奮しているのを察知した美加代は、大きく息を吸って、自分を落ち着かせようとした。普段は大人しく、一見、人に優しく面倒見の良い風に思わせるが、酒を飲むと豹変し、行き付けの店でさえ、見境無く他の客に絡んで、すぐに喧嘩を売ったり、問題ばかり起こす兼を、世間では、オオカミ兼と呼んでいた。

「私が頼んだ覚えは無い、やと…。ええ加減にさらせ」

不意に店のドアの鈴が鳴り、中肉中背で三十半ば程の男が入り口に立っていた。薄汚れて皺だらけのスラックスに、青と黒のチェックの長袖を右腕だけ捲っている。暗い空気の漂う店内を見渡し、低い声でカウンターの奥に立つ美加代に訊いた。

「やってるか」

兼が、男のつま先から頭までを、虚ろな目で舐めるように睨み付けた。

美加代は、緊張した先までの表情を急に緩め、慌ててカウンターの端からホールに出て、男をボックス席に案内した。

「お一人さん？」

美加代は男の前に座り、広げたおしぼりを手渡しながら訊いた。男は頷くと、焼酎のロックを注文した。兼は、身体を半分捻りながら、カウンター席から暫く様子を見ていたが、視線を外し、溶けた氷で薄まった自分のグラスにボトルの酒をつぎ足し、指で混ぜた。

「うちの店は、初めて？」

「ああ、焼酎やったら何でもいいで、ボトル降ろしといてや」

美加代の先回りをして、男が言った。

カウンターの中に美加代が準備に戻ると、腹立ち気に兼が言った。

「久美の奴、わしを誰やと思うとんねん。舐めとんのか。しまいめに何もかも、ひっくり返してもうたるか」

男を意識するように、大きな声でどすを利かせていた。

兼の酒癖の悪さを知っていたはずの美加代も、これほど鬱陶しい男だったかと、あらためて思い知らされた。それと同時に、じりじりと怒りが込み上げてきた。

「この前も、シャネルの指輪を買わされて、あほみたいや、返せっちゅうねん」

己の言葉に余計に怒りが込み上げてきた兼は、獲物を狙うオオカミの眼光を辺りに撒き散らせ始めていた。獣のように歯を剥き出しながら、子供のように歯軋りをした。美加代は、気まずそうにボックスの客に視線を向けたが、すぐに兼の顔を睨んだ。

急に兼は、思い立ったかのように、ボックスの男に身体を向けて喋り始めた。

「すまへん、どっかでお見掛けしやしたお顔でんな。何処のお人でしたやろか」

兼の席から二メートルほど先のソファに座った男が、兼を見た。美加代が男のテーブルにボトルやグラスを置きながら、兼を制するように声を上げて言った。

「黙って一人で飲んどきな。ウチの大事なお客さんに、絡まんといてんか」

美加代は、そう言うなり、男に申し訳なさそうに頭を下げ、グラスに芋焼酎を注いだ。兼は業を煮やし、すくと立ち上がると、美加代の前に仁王立ちし、顎を上げ、胸を反り返した。「おい、そこまで言うか。ちょっと、普通に訊いただけやろが。こっちも金払うて飲んでる客と違うんけ。わしを怒らせたらどうなるか、ちゃんと分かって、もの言うとなのか。後で自分でケツを拭けるんやろな」

眉間に思っきり皺を寄せ、兼は二人を睥睨した。男は、グラスを取り、一気に飲み干すと、兼をまじまじと見つめた。

「そんな一見のおっさん如きと、毎日金落としてやっているわしと、どっちを大切にするねん」

美加代は立ち上がって、兼の胸を強く押した。兼がとっさに身を引くと、美加代は蹠跟めいて床に倒れ込んだ。カウンターの椅子に美加代の身体が当たり、椅子が大きな音を立てて倒れた。美加代は崩れた身体を右腕で支えると、兼を見上げ、目を大きく開いた。

「二階の荷物をさっさとまとめて、とっとと出て行って頂戴！テレビもステレオも、何もかも全部、残さんと。」

「なに、よう言うたのう。こんな店、潰してもうたる。大阪の兄貴に電話入れて、ユンボ持って来さす。お前の方こそ荷物、まとめとかなあかんど」

兼が倒れた美加代を、右足で蹴り上げようとした瞬間、先にボックスに座っていた男の左足が兼の左足を払った。兼は、宙に浮き、仰け反って倒れた。透かさず男は兼に覆い被さって、兼の右脇腹に重心を掛けると同時に、首を太い腕で締め上げた。兼が右腕で男を振り払おうと藻掻くと、男はその腕を脇に挟み込み、身動きが取れないようにした。『袈裟固め』と呼ばれる柔道の寝技で、かなりの熟練者であることが見て取れた。振り払おうとすればするほど、強まる首への締め付けの苦しさに、兼は思わず唸った。

「い、息が、できひん」

男は、なおも締め続けた。しばらくして、兼が気を失い掛けた寸前に、男の手が緩んだ。兼は、咽ぶように咳を繰り返しながら座り直した。

美加代が呆然と立ち竦んでいたときに、カウンターの奥の階段から、物音に驚いた久美が慌てて下りてきた。スリッパを履き、店に出てきた久美は、立ち竦む美加代と見知らぬ男と、へたり込んで苦しげに咳をする兼を見比べた。

「どうしたのよ」

久美の問いに大まかに美加代が答えると、久美は兼を見下ろして怒鳴った。

「この碌でなし！とっとと消えちまえ」

久美の目から見る見るうちに大粒の涙がこぼれ落ちた。それは、悔恨と諦観の入り交じった、まだ十七歳の少女には上手く整理できない不透明な感情から流れ出ていた。ただ、母親と店を守らなければならないという漠然とした思いが先に立っていた。

兼は首を摩りながら、体力の回復を待った。久美の声も、美加代達の視線も意識に入ってはいなかった。いとも簡単に倒され、喉元を絞められたことへの屈辱感に震え、しかも相手が見知らぬ男で、どうみても堅気の人間に足蹴にされたままでは、後に引けるはずが無かった。

兼はすっと立ち上がって、カウンターの自分が飲んでいた焼酎の一升瓶を右手で掴むと、頭の上に振り翳しながら男に向かっていった。

「うおーっ！」

兼が突進してくると、男は右足を兼の股下に踏み込み、半回転して兼を背中に乗せ、自分が円の中心になって、その円周上に投げ捨てた。兼は、横に転がりながら吹き飛び、入り口のドアにぶち当たって止まった。

「ぐうあー」

床に脇腹をしたたか打ち付けた兼は、痛みと息が出来ない苦しさに、声にならぬ声を上げた。男は、入り口までゆっくりと歩いて行くと、ドアを開け、兼の首根っこを掴み、外に引きずり出した。

「このくそガキが。『投げの淳』と言われたわしの得意技を使わせやがって。さっさと、ママのおっぱいでもしゃぶりに帰んな」

男はそう言うと、ドアを閉めた。振り向くと、美加代が目の前をすり抜けて、慌ててドアに鍵を降ろした。ソファに座り直した淳は、大きな溜息をつくと、戻ってきた美加代を憐れむような目で見つめた。

「常連か？酷い酒乱やな。目がいっとったがな。つい、思いっきり技を掛けてもうた。ひよっとしたら、肋骨の一本や二本はへし折ったかも知れん」

美加代は、頭を垂れ、再び淳に詫びた。

6-2 老人

その時、突然、二人の目の前に、野球のボールが小さくバウンドをしながら転がってきた。やがて地面を滑るように移動し、拓斗の足下で止まった。右手の公園に目をやると、練習中の野球少年が、金網越しに申し訳なさそうに額の前で手を振っている。

屈んでボールを拾った拓斗は、ふっと息を吹き出し、続けざま小さく吸い込むと、スローモーションで少年の構えるグローブを目指して放り投げた。だが、そのボールは、距離にして十数メートルの空間を、弱々しく小さな弧を描いてすぐに落ちた。

少年は前進して、動きの止まりかけたボールをグローブの先で拾うと、帽子を取って丁寧にお辞儀をした。

「どうもありがとうございます、お爺さん」

拓斗は右手を軽く挙げた後、恵に振り向いてはにかむように笑った。その目尻の皺には、会わずにいた年月の長さをまざまざと思い知らされ、若き日の面影は、もうほとんど見られなかった。まだ五十代半ばなのに、真っ白な髪と天辺はげで、歳よりかなり老けて見えた。もし、今日、約束の場所で約束の時間に待ち合わせていなければ、きっと彼と分からなかったに違いない、と恵は思った。

でも、自分はどうか。ただの同居人みたいだった夫と別れた後、あれだけ愛した子供たちに裏切られ、唯一の慰みだった母に死なれ、傷つき疲れたこの人生に、深く刻み込まれた皺は無いとでも言えるのか。引かれる後ろ髪に自分で鋏を入れた恵にとって、美しく着飾ることにさえどこか罪の意識を覚えるということは、もう、女として生きる季節はとっくに過ぎたということを知っている。

6-4 マザーレイク

この大いなるマザーレイクも、拓斗を見ていた。この若者が、どんな風に生き、傷つき、悩みながら、誰を、何を愛して生きて行くのかを、黙ってじっと見ていた。

ようやく拓斗は気づいたのだ。普遍的な愛。一人はすべてに通じるということ。大地も大空も、そこに存在する何もかもが、愛すべき象徴であることを。だからこそ、たった今、自分の眼前にあるものを愛し、具体的に行動として表現して行くことが、最も大切なのだ。

そしてそれこそが、恵みを愛し続けて行くことに繋がるのだと言うことを確信した。

拓斗は、これまで自分と関わってきた人々を思い出してみた。言い知れぬ懐かしさが込み上げてくると同時に、泣きたいほどの感謝の気持ちが溢れてしかたなかった。

伽奈や美裕、真子や母親の顔が思い浮かぶと、今すぐ掛けだして力一杯抱きしめたい衝動に駆られた。近すぎて見えなかった自分の睫の先に、重くて愛おしい痛みがぶら下がっているのをはっきりと目視した。

拓斗は若い頃から、宇宙について興味があった。天体望遠鏡を覗いて、星を観察したりはしなかったが、高校生時代、ラグビー部の練習が終わった夕空の広がったグラウンドで、まだ大学を出て教師になったばかりのコーチが、空に一番星が輝いているのを指差しながら、低い声で言った言葉が忘れられなかった。

「お前らも、色んな悩みがあるだろう。友人や女のこと、或いは親のこともあるかも知れん。勉強の方は、もう、諦めてる奴ばかりだと思う。でもなあ、勉強が出来て、良い大学に入って、エリートコースを歩み、きれいな嫁さんを貰ってかわいい子供を作り、年取って行くだけで幸せになれるなんて、世の中、そんな甘くねえぞ。どうせ人間なんざ、この大宇宙から見たら、ひどく小っちゃなものなんだ。人の一生も、宇宙時間から計算したら、瞬きする時間の壱千億兆掛ける壱千億兆、そのまた壱千億兆よりも短い時間でしかない。そんな貴重な自分の一生を、金や地位や名誉を求め続けて無駄にするなよ。人間死ぬときにゃ、裸一貫だ。生きてたときに身についたものなんか、何の役にも立ちゃーしねえ。もっと人生を楽しめ。青春を味わえ。苦しいラグビーの練習だって、自分を鍛えてくれてるって思って、感謝して、そして楽しむんだ。良いか、よく憶えておくんだぞ。」

角刈りの頭を、厳つい手でぼりぼり搔きながら、部員一人一人を見渡した。

「それから、ラグーマン精神の、ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン（一人は皆のために、皆は一人のために）も、決して忘れるな。この精神こそ、お前らの本当の幸せを支えてくれる背骨となる。それは死んだ後にも残る真の財産だ」

そう言ってコーチは、暮れかけた空に数を増やした星々を見上げて、髪から手を下ろした。ちょっぴり自分の言葉に酔っているのが、拓斗は可笑しかったが、酔いが移ったのか、夜空に広がる宇宙を見つめて感動したのか、胸に込み上げるものがあった。それから拓斗は、今日までの人生の折々に、この話を思い出して、自分を鼓舞してきたことが少なくなかった。そして、苦しいときにこそ、誰かのために何かすることが、自分を救ってくれることにも、気づいた。

また、無限に広がる宇宙の視点から、人生の諸々のことを考えると、心が軽くなった。愛についてもそうだ。宇宙生命そのものが愛と言える。その中で、何処で誰が何を愛しても、すべての愛と結ばれている。例えば、大海の滴を何処で誰が掬っても、その成分は同じものを全部含んでいる。大海の中に滴があり、滴の中にも大海が包まれている。

恵は、拓斗の今直ぐ傍に居た。話しかけると、昔のように優しく微笑みながら応えてくれた。悲しみや苦しみ、寂しさに打ち震えているときには、そっと肩を抱きしめ、手を取って、あの延命山で踊ったダンスの続きを教えてくれた。

恵はそこに居た。自分の影にも、娘達の笑い顔の中にも、拓斗のことで思い悩んでいる妻の心にも。また、日に日に弱り、記憶が遠のき、今食べたものや、食べたことさえ忘れてしまう、衰え行く母の姿にも生きていた。道ばたで踏みつけた虫や、草花から、恵の泣き声が聞こえてきた。時折吹く風のささやきにも恵の吐息を感じた。ありとあらゆるものに、愛が息づくのが肌身を通して、拓斗の一番深いところに浸潤していくのだった。

さらに拓斗は考えた。自分はいったい、何を愛していたのか。今も続いているこの人生で、何を信じて生きていけば良いのか。拓斗の中で、宇宙が恐ろしいほどのスピードで、唸りを上げながらぐるぐると回転し始めた。

比良暮雪が美しい茜色に輝いていた。

コバルトブルーの空にくっきりと浮かび上がった山嶺は、一際その荘厳さを増し、恵の瞳の奥に染み渡った。その秀丽で明媚な意識の膜を破って、深層から止めどなく熱い涙が溢れ出した。情感渦巻くカオスの果てから、遠く低く囁くような声が聴こえて来た。あれは拓斗の呼ぶ声だろうか。はたまた淳が引き留める声なのか。子供達の鳴き声にも聴こえた。いや、子供の頃、親戚に預けられ、寂しさに自分が呼んでいた母親がようやく迎えに来てくれた時の優しい震え声かも知れない。

その呼び声に引き寄せられるように、恵はまるで大海のような激しい波が打ち寄せる波打ち際に歩を進めた。琵琶湖が見せるダイヤモンドの煌めきの中に、寂しげなオレンジ色が混ざる。そして躊躇うことなく湖に入って行った。対岸の比良山系から溶けた雪が川に流れ出し、冷水になって注ぎ込んでいた。何万年、何億年という気の遠くなるような長い年月を、波に揉まれ、冷たさに耐え、湖底を這うように流れてきた小石が恵の足指に絡んだ。

恵の頭の中は、真っ白になっていた。死というものへの意識は無かったと言っていい。その下の感覚的なものが、為体の知れぬ力に背中を押されていた。少しずつ水中に身体を沈めるごとに、感覚が自由に解放されて楽になる気がした。そしてそれは、まだ冷たい湖水の身体的な感覚を凌駕していた。死は、産まれてきた元の場所に帰ることだった。何にも縛られず、傷一つ無く、生きて行く為に生きる無垢な魂への帰還だった。

湖面に残った顔が、比良暮雪と同じ茜色の美しさに染まった。何処かで鴉が啼いていたが、もう恵の耳には届かない。足元の小石が足指を離れた瞬間、水面に髪の毛が放射状に伸び、すぐに中心へと収縮して泡の中に消えた。

その時、琵琶湖が深呼吸した。自身の肺に恵を深く吸いこむ大きく低い、湖底の更に下のマグマが揺らめいて響かせるような唸りを上げた。意識を失い掛けた恵の身体を振動させ、湖全体を揺るがせ、比良山を動かした。茜色に染まった残雪が雪崩となって川に崩れ落ちて行った。川は雪に溢れ、怒濤の如く湖に雪崩れ込み、湖底を掻き混ぜて底流の砂を湖面へ巻き上げた。舞い上がった無数の砂粒が辺りに拡がり、夕陽に照らし出されて、黄金色に茜色を織り交ぜた荘厳で神秘的な光輝く世界を現出させた。

それはまるで、遙かにあった比良暮雪が、今まさに消えかかろうとしている恵の命に呼び出されて舞い降りてきたかの様だった。

進路を変えた水流が、沈み行く恵の身体を攫った。

気がつくのと、波打ち際に戻されていた。

俯せになった身体に、静かになった波が寄せては返した。

暫くして、恵は夢から覚醒したかのように虚ろな目で現世を見つめた。砂浜をちょん、ちょんと二本の足で歩く一羽の痩せた鴉が目映った。夕陽に照らされても、どこまでも黒いままの色をしていた。

――お前もひとりぼっちなのか。あたしと一緒にの……。いや、それは違った。お前には、お前

の帰りを待つ子供か誰かがいるはず。あたしには、もう、誰も何も無い。でも、何か言っておくれよ。気の利いた鳴き声を聞かせておくれ。

底流の砂

この愛の向こう側に

<http://p.booklog.jp/book/20988>

著者：水沢一条

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatomimura/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20988>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20988>